

# 史跡 齋宮跡

令和4年度発掘調査概報

2024年3月

齋宮歴史博物館





第 203 次（2区）調査区遠景（北西から）



第 203 次（2区）調査区全景（北西から）





第 203 次（2 区）調査区全景（北から）



S811622 柱穴 3 柱抜取痕跡検出状況（北から）



## 序

日本のみならず世界で大流行した新型コロナウイルス感染症は、令和4年度は流行3年目となり、日本社会においても感染予防に対する意識が根付いてきました。そのような中、史跡齋宮跡では「さいくう平安の杜」でのプロジェクションマッピングや、博物館エントランスでのデジタルアート展示など、感染対策を取りながら様々なイベントが実施され、多くの人たちが史跡を訪れ、楽しんでいただきました。

コロナ禍にあっても、史跡齋宮跡の発掘調査は継続して実施し、令和3年度までに飛鳥時代の齋宮中枢域の様相が明らかとなり、県内外の皆さまに注目されることとなりました。これもひとえに、地域の皆様の応援・ご協力があったからこそと改めて感謝いたします。

さて、今回報告する第203次発掘調査は、奈良時代の齋宮にかかる実態を解明するため、史跡西部の中垣内地区で行ったものです。調査の結果、奈良時代正方位区画内の構造の把握について大きな成果をあげる事ができました。この調査で得られた成果は、地元明和町をはじめ、ひろく県民の皆様や齋宮跡を訪れる皆様に還元できますよう、積極的に情報発信してまいります。

今後も齋宮歴史博物館は、全国で唯一無二の遺跡となる齋宮を体感できるサイトミュージアムとして、一層魅力ある活動を続けてまいります。

史跡齋宮跡の保存および調査研究・整備活用にあたり、貴重なご意見やご指導を頂きました文化庁、齋宮跡調査研究指導委員ほか多くの方々や、発掘調査にあたり様々なご配慮・ご協力を頂きました国史跡齋宮跡協議会をはじめとした地元の皆様に厚く御礼申し上げます。

2024（令和6）年3月

齋宮歴史博物館

館長 大西 宏明

## 例 言

- 1 本書は、齋宮歴史博物館が令和4年度に国庫補助金を受けて実施した史跡齋宮跡発掘調査（第203次調査 1区・2区）の概要をまとめたものである。
- 2 明和町が調査主体となって実施した、史跡現状変更等に伴う緊急発掘調査の第202次調査報告書は、別途明和町が刊行する予定である。
- 3 遺構の実測にあたっては、日本測地系による国土調査法（旧国土座標）の第VI座標系を基準とし、方位は旧国土座標による座標北で示している。
- 4 遺構時期区分の指標となる土器分類と年代観については、一部を除き以下の文献に拠った。  
齋宮歴史博物館 2018「齋宮跡の土器編年の再検討」『齋宮跡発掘調査報告Ⅱ 柳原区画の調査 出土遺物編』
- 5 齋宮跡の時期区分については土器編年に基づき、期と段階を用いて「齋宮跡Ⅱ期第1段階」等と表記するが、本文中ではこれを簡略的に「齋宮Ⅱ-1期」と表現している。
- 6 遺構表示記号は、文化庁文化財部記念物課 2010『発掘調査のてびきー集落遺跡発掘編一』に準拠し、遺構の種類から次のように表記している。  
SA：塀・柱列 SB：掘立柱建物 SD：溝 SE：井戸 SK：土坑 SZ：周溝墓 SP：柱穴・ピット
- 7 遺物実測図は基本的に実物の4分の1で行っている。遺物写真は縮尺不同である。
- 8 土層および出土遺物の色調は、日本色研事業株式会社発行『新版標準土色帖』（2004年度版）に拠る。施軸陶器の色調については一部、大日本インキ化学工業株式会社発行『日本の伝統色』第5版（1989年）を用いて補っている。
- 9 発掘調査にあたっては、以下の方のご指導、ご協力を賜った。  
塩川哲朗（敬称略）
- 10 図面・写真等の調査資料及び出土遺物は、齋宮歴史博物館で保管している。
- 11 発掘調査は川部浩司（1区）、山中由紀子（2区）が行った。また、本書の執筆・編集は川部・山中・小原謙也が担当し、現地調査及び資料整理については、大川勝宏・八木光代・大和谷周子・中西宏美の補助を得た。空中写真撮影は、明和町齋宮跡・文化観光課の協力を得て実施した。



# 目次

I 前言	1
II 第203次調査(1区)	7
III 第203次調査(2区)	17

## 挿図目次

第I-1図	史跡斎宮跡位置図	4
第I-2図	令和4年度発掘調査位置図	5
第I-3図	史跡斎宮跡における大地区表示図	6
第II-1図	第203次調査(1区)グリッド図	7
第II-2図	第203次調査 調査区位置図	8
第II-3図	第203次調査(1区) 遺構平面図・土層断面図	9
第II-4図	第203次調査(1区) 出土遺物実測図1	11
第II-5図	第203次調査(1区) 出土遺物実測図2	12
第II-6図	第203次調査(1区) 出土遺物実測図3	12
第II-7図	斜方位区画の西第三堂の変遷図	13
第II-8図	飛鳥時代の斎王宮殿城の遺構配置図	14
第II-9図	奈良時代の斎王宮殿城の遺構配置図	15
第III-1図	第203次調査(2区)グリッド図	17
第III-2図	第203次調査(2区) 遺構平面図	18
第III-3図	第203次調査(2区) 調査区土層断面図	19
第III-4図	第203次調査(2区) 弥生時代遺構分布図	20
第III-5図	S Z 11623 土器出土状況図	21
第III-6図	第203次調査(2区) 古墳～飛鳥時代遺構分布図	22
第III-7図	S K 11613 平面・土層断面図	23
第III-8図	第203次調査(2区) 奈良時代遺構分布図	24
第III-9図	第203次調査(2区) 平安時代前期遺構分布図	24
第III-10図	SA11629 平面図	25
第III-11図	SB11620・SB 11621 平面・土層断面図	26
第III-12図	SB11622 平面・土層断面図	27
第III-13図	第203次調査(2区) 平安時代末～鎌倉時代遺構分布図	28
第III-14図	第203次調査(2区) 出土遺物実測図1	29
第III-15図	第203次調査(2区) 出土遺物実測図2	30
第III-16図	第203次調査(2区) 出土遺物実測図3	31
第III-17図	第203次調査(2区) 出土遺物実測図4	33
第III-18図	第203次調査(2区) 出土遺物実測図5	34
第III-19図	調査区北西・北東部の掘立柱礎・掘立柱建物 平面図	39
第III-20図	中垣内地区における正方区画	40

## 表目次

第Ⅰ-1表	令和4年度史跡斎宮跡の現状変更等許可申請一覧	3
第Ⅰ-2表	令和4年度発掘調査一覧	3
第Ⅱ-1表	第203次調査(1区) 建物等一覧	10
第Ⅱ-2表	第203次調査(1区) 土坑・溝一覧	10
第Ⅱ-3表	第203次調査(1区) 遺物観察表	12
第Ⅲ-1表	第203次調査(2区) 遺構一覧	42
第Ⅲ-2表	第203次調査(2区) 掘立柱礎・掘立柱建物一覧	42
第Ⅲ-3表	第203次調査(2区) 遺物観察表1	43
第Ⅲ-4表	第203次調査(2区) 遺物観察表2	44
第Ⅲ-5表	第203次調査(2区) 遺物観察表3	45
第Ⅲ-6表	第203次調査(2区) 遺物観察表4	46

## 写真図版目次

巻頭図版1	第203次調査(2区) 区遠景/第203次調査(2区) 区全景	
巻頭図版2	第203次調査(2区) 区全景/S B 11622 柱穴3 柱抜取痕跡検出状況	
写真図版1	第203次調査(1区) 斜方位区画南西角の柱穴/斜方位区画の塀南辺 SA11510・11511 / 斜方位区画の西第三堂 SB6292・SB11505 / 1区東追加区①・②/ 西方位区画の塀北辺 SA11633	16
写真図版2	S Z 11623 弥生土器(3) 出土状況/S Z 11623 弥生土器(2) 出土状況/ S Z 11623 土層断面/S K 11614 / S K 11613 半裁状況・土層断面	47
写真図版3	S A 11630・S D 11612 / S A 11630 / S B 11620・S B 11621	48
写真図版4	S B 11620・S B 11621 柱穴2土層断面/s14 pit 3土層断面/ S B 11622 柱穴3土層断面/S B 11622 柱穴2土層断面/ S D 11612 土層断面/S E 11625 土層断面/S D 11615	49
写真図版5	第203次調査(2区) 出土遺物	50

# I 前 言

## 1 調査の経緯と概要

### (1) 史跡齋宮跡にかかる経緯と経過

齋宮跡の発見の契機は、高度経済成長期に齋宮段丘面の西縁部で大規模な宅地造成計画がなされ、その開発事業に先立って実施された昭和45年の齋宮跡（古里遺跡）の確認調査による。その後の発掘調査では、大型の建物を含む多くの掘立柱建物、井戸、土坑、奈良時代と鎌倉時代の大溝、跡脚礎や大型赤彩土馬、緑軸陶器等が発見され、齋宮関連の重要遺跡と認識された。昭和48年度から文化庁の補助事業として確認調査を重ね、昭和54年3月27日に国史跡に指定され、東西約2km、南北約700mに及ぶ137haの史跡範囲が把握されるに至った。管理団体は、明和町である。

三重県は、史跡指定に伴い齋宮跡調査事務所を設置して発掘調査にあたり、平成元年度からは新たに開館した齋宮歴史博物館によって、史跡の実態解明のための計画的な学術調査を継続的に実施している。

齋宮跡の発掘調査では、史跡東部に所在する平安時代の方格街区と齋宮中核部の解明が進んだ。平成27年度には、柳原区画で平安時代前期の齋宮寮庁を対象に、史跡整備の一環として正殿・西脇殿・東脇殿の復元建物を建設し、史跡公園「さいくう平安の杜」を公開活用されている。

明和町は、「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」に基づき、平成23年度から「明和町歴史的風致維持向上計画」の策定に取組み、平成24年6月6日に国の認定を受けた。同計画に基づき、下園東区画周辺において来訪者の案内・交流を目的とした施設整備を計画し、平成24年度に発掘調査を行い、平成27年度から工事に着手、平成29年3月に「いつきのみや地域交流センター」が竣工した。平成27年4月24日には、「祈る皇女齋王のみやこ 齋宮」が日本遺産に認定された。

### (2) 史跡齋宮跡の発掘調査

齋宮跡の発掘調査は、昭和45年の確認調査（第1次）を皮切りに、史跡内容確認の計画的な学術調査、現状変更等に伴う調査が積み重ねられ、令和2年度には50年目の節目を迎えた。これまでは、史跡東部に位置し、平安時代の齋宮の中心地である、方格街区内部の発掘調査に重点を置き、具体的な構造の解明に取り組んできた。

これらの成果は、発掘調査概報として毎年刊行しているが、正式な発掘調査報告書『齋宮跡発掘調査報告』は、齋王の宮殿「内院」（報告Ⅰ）、柳原区画の「齋宮寮庁」（報告Ⅱ）、下園東区画の「寮庫」（報告Ⅲ）、西加座南区画の「神殿」（報告Ⅳの一部）、飛鳥時代の齋宮中核部の調査（報告Ⅴ）を刊行している。今後は、これまで調査を行ってきた方格街区の他の区画とともに、奈良時代の齋宮中核部にかかる発掘調査の正式報告書を順次刊行していく方針である。

### (3) 「発掘調査基本方針」の策定

齋宮歴史博物館は平成29年3月、史跡齋宮跡発掘調査の考え方や調査計画をまとめた『史跡齋宮跡発掘調査基本方針』を策定した。当該方針等での史跡内容確認は、初原期（飛鳥～奈良時代）の齋宮の実態解明、方格街区内部構造の解明、衰退期（平安～鎌倉時代）の齋宮の実態解明、齋宮に関わる居住、生産・流通、墓域等の解明の4項目を課題に挙げた。今目的かつ当面の重点目標として、史跡西部での飛鳥～奈良時代齋宮中核部の実態解明調査を掲げている。特に史跡西部の中でも中垣内地区は、古代伊勢道が本来の直線道路から北側にわずかに湾曲する部分を含み、古代伊勢道から南側に派生する道路がみられるなど、古代伊勢道敷設以前の重要施設が集中していたと想定されている。

これまで、平面方位で北から東に約33°の傾きをもつ飛鳥時代の掘立柱塼による方形区画と区画内部の建物群、その西側に総柱建物群を確認している。さらに奈良時代になると、平面方位を正方位へと変

えた掘立柱塼による方形区画の存在が確認されている。

#### (4) 史跡齋宮跡の公開事業

齋宮歴史博物館では、史跡への来訪者増加や魅力の向上のために、発掘調査現場の積極的な公開活用、発掘調査成果の情報発信を行っている。令和4年度は新型コロナウイルス感染症の流行が続いていたが、その対策が取られて3年目に入ろうという段階であったため、適切な感染対策が社会的に浸透しており、公開に当たって見学者側においても感染対策に理解を得られていた。また、公開に関わるイベントにおいても技術が発展しており、手探りながら新たな公開手法を取り入れ、調査成果の公開を進めた。

発掘調査現場の公開について具体的には、発掘調査見学者への随時公開・説明、ホームページを通じた情報発信とともに、現地説明会を実施した。第203次(2区)調査の随時公開の見学者はのべ317名、現地説明会(令和5年2月18日(土)10時30分～12時)は95名であった。

齋宮跡の発掘調査開始当初から実施している子ども1日体験発掘教室はこれまでと同様のプログラムでは感染症対策上、プログラムの変更やいは実施に工夫が必要であり、その対応策が困難であることから令和2年度から休止しており、令和4年度においても実施しなかった。

その他の発掘調査成果公開として、令和5年3月18日(土)13時から、発掘成果報告会「奈良時代の齋宮解明へ」を齋宮歴史博物館講堂において実施、52名の参加を得た。

#### (5) 調査体制

史跡齋宮跡の調査研究・整備活用に関する業務は、齋宮歴史博物館調査研究課が担当した。当該報告に関わる組織は以下の体制で行った。

令和4年度

大川勝宏・山中由紀子・川部浩司・小原雄也

令和5年度

山中由紀子・川部浩司・大川勝宏・小原雄也

## 2 齋宮跡調査研究指導委員会

齋宮跡の調査・整備について指導・助言を得るため、令和5年2月16日(木)に齋宮跡調査研究指導委員会を開催し、第203次(2区)調査の調査成果や明和町の整備事業について指導及び助言を得た。指導委員の方々は下記のとおりである。

〔指導委員〕

浅野 聡 (三重大学大学院教授)

稲葉信子 (筑波大学名誉教授)

小澤 毅 (三重大学教授)

京楽真帆子 (滋賀県立大学教授)

金田章裕 (京都大学名誉教授)

黒田龍二 (神戸大学名誉教授)

仁藤智子 (国士館大学教授)

増淵 徹 (京都橘大学教授)

本中 眞 (奈良文化財研究所長)

本橋裕美 (愛知県立大学准教授)

渡辺 寛 (皇學館大学名誉教授)

綿貫友子 (神戸大学大学院教授)

(五十音順・敬称略)

## 3 令和4年度発掘調査一覧

文化財保護法第125条第1項の規定による史跡現状変更等許可申請のうち、令和4年度は56件(国許可10件、県許可46件)があった。このうち、当該許可申請の許可条件に基づく史跡齋宮跡の発掘調査及び立会いを要した案件については、その内訳を第1-1表、発掘調査を実施した内容は第1-2表にまとめた。

明和町主体の第202次調査については、『史跡齋宮跡 令和4年度 現状変更緊急発掘調査報告』として、令和5年度に明和町が刊行する予定である。

現状変更等許可申請の内容	申請及び許可 件数	対応別件数
個人・民間企業による申請	37	発掘調査 3、立会 21
明和町による地域環境整備に伴う申請	24	発掘調査 1、立会 23
明和町等による史跡環境整備及び維持管理に伴う申請	5	発掘調査 2、立会 3
三重県による計画的発掘調査のための申請	2	発掘調査 2

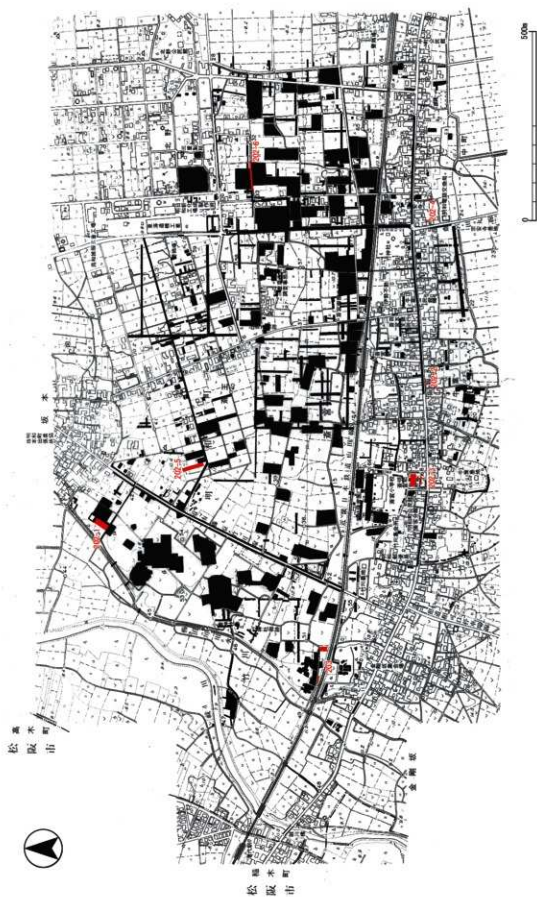
第 1 - 1 表 令和 4 年度史跡斎宮跡の現状変更等許可申請一覧

調査次数	地区	調査面積 (㎡)	調査期間	調査場所	現状変更 申請者	現状変更 申請理由	保存管理の 土地利用区分
203 (2 区)	G10	200	R4. 10. 7～R5. 3. 17	明和町大字竹川字中垣内	三重県	計画発掘調査	第二種保存地区
202-1	K4	510.9	R4. 4. 6～R4. 9. 1	明和町大字竹川字古里	民間企業	盛土造成工事	第三種保存地区
202-2	N13	2. 6	R4. 6. 3	明和町大字斎宮字牛薬	個人	住宅建築	第四種保存地区
202-3	L12 ・ 13	642. 5	R4. 10. 3～R5. 1. 18	明和町大字斎宮字牛薬	明和町	発掘調査	第三種保存地区
202-4	R13	2. 4	R4. 11. 7	明和町大字斎宮字中西	個人	住宅建築	第四種保存地区
202-5	L7	487. 1	R5. 1. 19～R5. 3. 22	明和町大字斎宮字塚山	個人	資材置場設置	第三種保存地区
202-6	M12	266. 9	R5. 1. 26～R5. 3. 2	明和町大字斎宮字西加座	明和町	排水路改修	第一・二・三種 保存地区

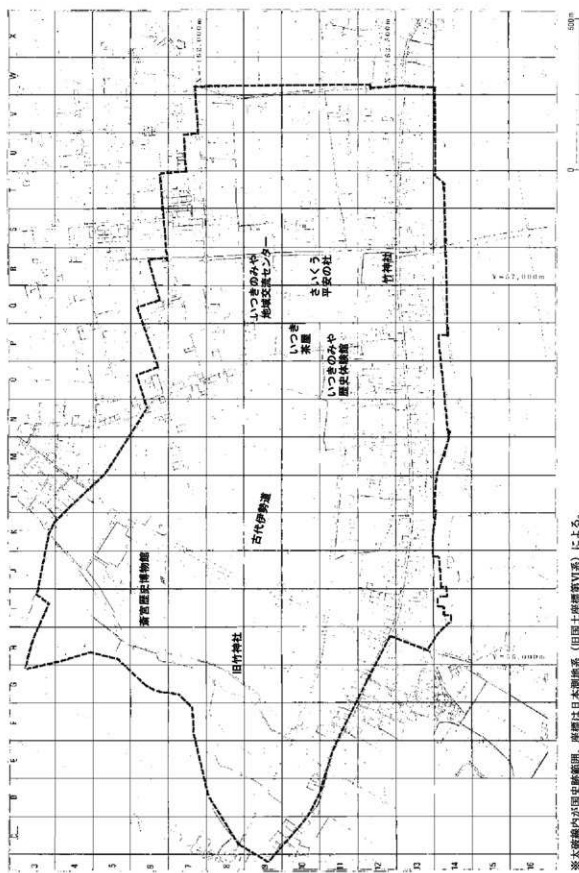
第 1 - 2 表 令和 4 年度発掘調査一覧



第1-1図 史跡齋宮跡位置図 (1:500,000・国土地理院1:25,000「松版」「明野」を改変)



第1-2図 令和4年度発掘調査位置図(1:10,000)



第1-3図 史跡斎宮跡における大地区表示図 (2002年策定)

※大宮跡内が国史跡範囲、産標は日本産地系 (旧国土産標第VI系) による。



## II 第203次調査（1区）

（6AF10中垣内地区）

### 1 はじめに

1970年に始まった斎宮跡（古里遺跡）の発掘調査は、2023年で54年目の積み重ねがあり、約800箇所の調査地点を数える成果が得られている。

史跡西部の斎宮段丘面（明野原台地）西縁部には、東西に敷設される古代伊勢道を基点とした南・北派生道路沿いに飛鳥・奈良時代の掘立建物や堅穴建物など、広範な遺構形成が確認されている。特に一本柱列の区画による方形区画は複数箇所で見られ、斎宮中核域としての空間整備が認められる。史跡東部で奈良時代末に内院、平安時代には方格街区が造営される以前の飛鳥・奈良時代の中核域が所在するエリアとなる。

斎宮中核域としての方形区画は、飛鳥時代の「斜方位区画」、奈良時代の東西二つが並ぶ「東正方位区画」・「西正方位区画」、平安時代にも方形区画が認められ、段丘崖付近の概ね同一の地点において造営される特徴がある。

2017年に斎宮歴史博物館が策定した『史跡斎宮跡発掘調査基本方針』では、初現期（飛鳥～奈良時代）の斎宮の実態解明を重点調査（第1期計画調査）に掲げ、2016～2021年度に本調査、2022年度に補足調査を実施してきた。こうした飛鳥時代の斎宮中核域の調査については、2022年度末に正報告書としてすでに刊行している<sup>1)</sup>。

正報告書では、飛鳥時代の方形区画（斜方位区画）を「斎王宮殿域」として斎王の居所および執務・儀礼空間の可能性を指摘したところである。本章は、正報告書に収録できなかった2022年度の補足調査（第203次調査（1区））の詳細報告となる。

さて、第203次調査（1区）は、飛鳥時代の斎宮跡の実態解明にかかる補足調査として実施した。調査地は、史跡西部の中垣内地区に位置し、近鉄山田線の線路と町道の間の狭隘な場所にあたる。

今回は飛鳥時代の斜方位区画内部の建物配置を明らかにすることを主眼とし、特に区画南西角の様相をはじめ西第三堂の構造と規模の把握を目的としている。調査は断続的に実施したことで、便宜的に「東」・「中央」・「西」の3つの調査区を主とし、東区の拡張区として追加区①・②を設けた。

### 2 地形環境と地層

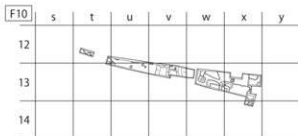
史跡斎宮跡は、紀伊山地に端を発する櫛田川（畷川）・宮川の流域に挟まれた明野原台地の西方に位置する。後背の王城丘陵・大仏山丘陵を基点として、そこから北へ段丘高位面（明野段丘面）、段丘中位面（斎宮段丘面）の順に地形は下降し、東西に広がる沖積低地（海岸平野・氾濫平野・三角州・後背低地）を介して、伊勢湾へと連なる。史跡斎宮跡は、段丘中位面（斎宮段丘面）に立地する。史跡西部の段丘西縁部を最高所（標高14.5m程度）として、全体に東北東に向けて緩やかに下へ傾斜し、史跡の東部では標高9m程度となる。傾斜角度は1°に満たない程度の平坦な地盤を形成している。

第203次調査（1区）の現地表面は、13.7～14.5mの標高を測り、遺物包含層上面の標高は13.4～13.9m、遺構検出面（地山面）の標高は13.3～13.7mである。段階的に設けた調査区の情報は以下のとおりである。

**1区西** 東西約1.5m、南北約0.5m。地表面（標高約13.9m）から深さ約0.5m（標高13.4m付近）で遺物包含層と遺構面、深さ約0.6m（標高13.3m付近）で地山面に至る。

**1区中央** 東西約9.3m、南北は西端で約0.9m、中央付近で約1.4m、東端で約1.0m。地表面（標高13.9～14.1m）から深さ約0.3m（標高13.7m付近）で遺物包含層と遺構面、深さ約0.4m（標高13.6m付近）で地山面に至る。

**1区東** 東西約6.0m、南北は西端で約1.6m、東端で約2.4m。地表面（標高14.1～14.2m）から深さ0.3～0.4m（標高13.8～13.9m）で遺物包含層と遺構面、深さ約0.5m（標高13.7m）で地山面に至る。



第II-1図 第203次調査（1区）グリッド図（1：400）





1区東(追加区①・②) ①東西約1.4m、南北1.2m。②東西約1.0m、南北1.2m。地表面(標高約14.1m)から深さ約0.3m(標高約13.8m)で遺物包含層と遺構面、深さ約0.4m(標高13.7m)で地山面に至る。

地層の把握は、第192・195・199・200次調査での観察所見としつつ、第85・8・193・197次調査で得られた地層の認識を参考とした。基本層序は上から表土(A1層)あるいは砕石層(A2層)、暗灰黄色シルト(耕作土層もしくは整地土層:A3層)、暗褐色シルトもしくは黒褐色シルト(遺物包含層:B層)、地山(C層)からなる。古代・中世の遺構はB層上面から掘り込まれているが、便宜上C層上面で遺構検出を行った。

### 3 遺構

斎宮跡に関連する古代の検出遺構は、建物柱穴・土坑である。出土遺物はB層中のものが大半であり、弥生土器や7～8世紀とみられる土師器杯・須恵器杯蓋などの破片が出土している。土坑からは完形品をふくむ9世紀前半～中葉(斎宮Ⅱ-2～Ⅱ-3期)の土師器杯・皿が折り重なって出土した。

重要遺構は1区西、1区中央の西端、1区東で検出した飛鳥時代と奈良時代の建物柱穴である。柱掘方の埋土は黒褐色シルトで、柱痕跡が確認されるもの、それを通り明褐色シルトを埋土とする小穴が認められるものがあり、いずれも一辺0.7m以上の平面形が隅丸方形を呈する。柱痕跡や柱抜取穴の存在から掘立柱塼あるいは掘立柱建物の柱穴と想定した。

斎宮跡関連以外の遺構として、鎌倉時代以降の区画溝などがある。なお、第85・8・197次調査などの隣接地で検出された弥生・古墳時代の遺構は、当該調査区では未確認となる。

#### (1) 飛鳥時代の遺構

7世紀後半～8世紀初頭(斎宮Ⅰ-1期)の一本柱列の区画塼や掘立柱建物の柱穴を検出した。これらの柱穴は、飛鳥時代の斎宮中核域と想定される方形区画(約33°東偏する斜方位区画)を構成する遺構である。検出した柱穴は、区画塼の西辺(SA6280)と南辺(SA11510・11511)、外周建物の脇殿のなかでも西第三堂(SB11505・6292)となる。

SA6280とSA11510・11511は1区西と1区中央(t12・t13・u12・u13)、SB11505・6292は1区東(w13・x13)で検出した。個々の遺構は以下で詳述するとともに、第Ⅱ-3図・第Ⅱ-1・2表にまとめた。

なお、斜方位区画を構成する区画塼や掘立柱建物などの詳細は、既刊の正報告書や概報<sup>12)</sup>を参照されたい。

SA6280〔区画塼西辺〕 1区西では、斜方位区画の塼南西角の柱穴を検出した。区画塼の西辺(SA6280)と南辺(SA11510・11511)を結んだ南西角の柱穴である。区画塼西辺をみると第85・8・199・200次調査で確認されたその延長線上に相当する。

第199・200次調査の所見から、柱掘方の平面形は隅丸方形を呈し、直径0.8～1.0mを測る。柱掘方埋土は黒褐色シルトを主体とする。第85・8・199・200次調査では、布掘り柱掘方(いわゆる溝持ち構造か)が確認され、深さ0.5～0.9m、柱痕跡の直径は約0.2mを測ることが判明している。また、布掘り柱掘方は埋戻され、その上部から壺掘り柱掘方により柱穴を設置しているようである。柱間は2.3mを測り、柱穴の抜取穴の状況から概ね同じ位置に1回の建替えを認める。塼北辺SA11300・11120と塼東辺SA11310の構造と異なる特徴があり、こうした工法の違いは西第一・二堂の側柱西筋から塼への転換によるものであろう。この間には、西門SB11501が設けられる。

遺構名	基礎構造	建物形式	平面形式	桁行間数 柱間	桁行総長	棟行間数 柱間	棟行総長	平面積	備考	遺構の性格
SA 6280	掘立	一本柱塼	—	1間 2.2～2.4m	57.8m	—	—	—	西辺(飛鳥) Ⅱ期・建替後	遺構
SA 11510	掘立	一本柱塼	—	1間 2.3m	38.2m	—	—	—	南辺(飛鳥) Ⅰ期・建替前	
SA 11511	掘立	一本柱塼	—	1間 2.3m	40.8m	—	—	—	南辺(飛鳥) Ⅱ期・建替後	
SA 11633	掘立	一本柱塼	—	1間 2.3m	52.5m	—	—	—	北辺(奈良)	
SB 11505	掘立	側柱	塼塼	5間 23.34m	11.7m	2間 2.1m	4.2m	49.1㎡	Ⅰ期・建替後	
SB 6292	掘立	床束	塼塼	6間 23.4m	11.7m	2間 2.2m	4.4m	51.4㎡	Ⅱ期・建替後	西第三(塼)G

第Ⅱ-1表 第203次調査(1区) 建物等一覧

遺構名	調査時 遺構名	グリッド	時期	出土遺物
SK 11634	ピラ	v13	9世紀前半～中葉	土師器
SK 11635	土坑1	w13,x13	12世紀後半～13世紀前半	土師器・陶器
SD 6292	SD6.292(東)	v13	13世紀後半～	土師器
SD 11636	SD6.292(西)	v13	13世紀後半～	土師器

第Ⅱ-2表 第203次調査(1区) 土坑・溝一覧

第199・200次調査では、SA11510の柱掘方・柱抜取穴から須恵器杯B、土師器杯Gが出土している。廃絶時期の上限は飛鳥Vに位置付けられ、7世紀末～8世紀初頭に属するとみられる。今回の第203次調査（1区）では遺物の出土はみられなかった。

**SA11510・11511 [区塙南辺]** 1区中央の西端で重複する2つの柱穴を検出した。斜方位区画の掘立柱塙南辺（SA11510・11511）である。南西角の柱穴とそれから東へ1つ目の柱穴のみの検出であり、後者は柱穴2基の重複を認めるため1回の建替えが推定される。飛鳥斎宮I期遺構をSA11510、II期遺構をSA11511と遺構番号を付与した。1区西で確認した南西角の柱穴は建替えを伴わない特徴があり、北西角の柱穴とともに方形区画造営の基点であった可能性が考えられる。

**SB6292 [西第三章（新）]** 1区東で検出した桁行5間×梁行2間（11.7m×4.4m）の東西棟の掘立柱建物である。SB11505の建替え後の建物で、飛鳥斎宮II期遺構に相当する。SB11505から南側柱の位置は変えず、東へ約2.4mずらした位置に建替えられる。梁行が0.2m長くなる分は北へ広げている。東妻柱中央の両脇には東柱が設置されている。

**SB11505 [西第三章（古）]** 1区東で検出した桁行5間×梁行2間（11.7m×4.2m）の東西棟の掘立柱建物である。西側妻柱には連結桁が取り付けるとみられる。

### （2）奈良時代の遺構

1区東（追加区②）で西正方形区画の塙北辺の柱穴を検出した。第189次調査で確認された塙北辺の延長線上に相当する。概報<sup>13)</sup>ではSA9472と記されたが、第146・182-1・189次調査で確認された塙東辺とし、今回の塙北辺についてはSA11633と新たに遺構番号を付与した。

**SA11633 [区塙北辺]** 1区東追加区②で検出した掘立柱塙の柱穴である。平面形は直径約1.2mの隅丸方形を呈する。深さは地山面から約0.3mを測る。黒褐色シルトを埋土とする柱掘方に明褐色シルトの入る柱抜取穴が上部より穿たれる。土師器片の出土はあったが、図化できるものはなかった。

### （3）平安時代前期の遺構

1区東追加区①では、9世紀前葉～中葉（斎宮II-2～II-3期）の土坑SK11634を検出した。**SK11634 [土器溜まり]** 平面形の全容は不明であるが、おそらく直径0.6m程度の円形と推測される。

深さは地山面から約0.15mを測り、明黄褐色シルトを埋土とする。完形品をふくむ土師器杯・皿が折り重なって出土した（第II-4図）。

### （4）平安時代末～鎌倉時代前期の遺構

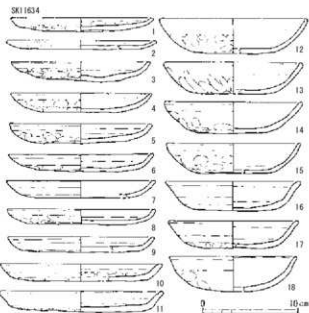
1区西では、12世紀後葉～13世紀前葉（斎宮IV-1期）の土坑SK11635、13世紀後葉（斎宮IV-3）の溝SD11636を検出した。なお、鎌倉時代以降の遺構は、周辺の調査区でも数多く確認されている。

**SK11635 [陶器甕埋設土坑]** 平面形は直径約0.7mの不整形円形を呈し、深さは約0.2mを測る。明黄褐色シルトを埋土とする。土坑からは常滑産陶器甕が出土した（第II-5図）。出土状況から陶器甕の底部から胴部下半までを土坑底に据えて埋置していたと推定される。

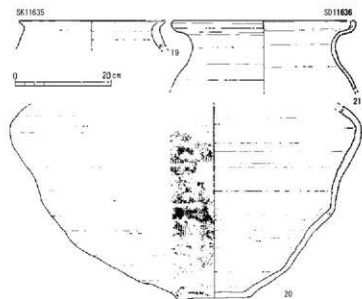
**SD11636 [屋敷地区画溝]** 1区中央東端で検出した幅約1.1mの南北方向の溝は、第85-8次調査のSD6282の延伸部分である。その西隣に併走する幅約1.4mの溝SD11636は、第85-8次調査のSD6282より分岐する溝である。13世紀後葉以降の所産で、屋敷地などの土地区画や排水機能をもつ溝と推定される。土師器鍋（南伊勢系）の口縁部～胴部片が出土した（第II-5図）。

## 4 遺物

遺物整理用コンテナ5箱分の遺物が出土し、弥生土器、土師器、須恵器、陶器、近世陶磁があった。遺構番号順で時代ごとに詳述する（第II-4～6図）。



第II-4図 第203次調査（1区）出土遺物実測図1（1：4）



第Ⅱ-5図 第203次調査(1区)  
出土遺物実測図2(1:8)

遺物包含層



第Ⅱ-6図 第203次調査(1区)  
出土遺物実測図3(1:4)

(1) 平安時代の遺物(第Ⅱ-4図)

SK11634出土遺物(1~18) 1~11は土師器皿、12~18は土師器杯Gである。皿は器高2cm以内で、口径15cm前後と17cm前後の2種がある。杯Gは口径14cm前後、器高4cm以内にいずれも収まる。9世紀前葉~中葉(寄宮Ⅱ-2~Ⅱ-3期)に属する。

(2) 鎌倉時代の遺物(第Ⅱ-5図)

SK11635出土遺物(19~21) 19は常滑産陶器甕の口縁部、20は19と同一個体と考えられる胴部~底部片である。胴部最大径付近の外面上には帯状連続施文した押印文を施す。19の口縁部形態と20の胴部形状から12世紀後葉~13世紀前葉の所産とみられる。21は南伊勢系土師器鍋の口縁部~胴部片である。13世紀後葉の所産とみられる。

(3) 遺物包含層(第Ⅱ-6図)

遺物包含層出土遺物(22~23) 22は土師器皿、23は土師器甕である。22はおそらくSK11634からの出土と推測される。

番号	層位	種別	調査次数	地区	遺物	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	構成	色相	厚薄度	備考	登録番号
1	土師部	皿	203(19C)	1区東(追加区G)	SK11634	口径 14.6 外底:コナダレナゲ・オササ 器高 1.4 内底:コナダレナゲ・オササ	口径 14.6 外底:コナダレナゲ・オササ 器高 1.4 内底:コナダレナゲ・オササ	常良	横7.5×97.6	白	口縁部/12		002-02
2	土師部	皿	203(19C)	1区東(追加区G)	SK11634	口径 15.4 外底:コナダレナゲ・オササ 器高 1.9 内底:コナダレナゲ	口径 15.4 外底:コナダレナゲ・オササ 器高 1.9 内底:コナダレナゲ	常良	横7.5×97.6	白	口縁部/12		002-03
3	土師部	皿	203(19C)	1区東(追加区G)	SK11634	口径 14.6 外底:コナダレナゲ・オササ 器高 2.0 内底:コナダレナゲ	口径 14.6 外底:コナダレナゲ・オササ 器高 2.0 内底:コナダレナゲ	常良	横7.5×97.6	白	口縁部/12	内・外底:遺物付着	001-03
4	土師部	皿	203(19C)	1区東(追加区G)	SK11634	口径 14.8 外底:コナダレナゲ・オササ 器高 2.0 内底:コナダレナゲ	口径 14.8 外底:コナダレナゲ・オササ 器高 2.0 内底:コナダレナゲ	常良	横7.5×97.6	白	口縁部/12		002-06
5	土師部	皿	203(19C)	1区東(追加区G)	SK11634	口径 15.0 外底:コナダレナゲ・オササ 器高 2.1 内底:コナダレナゲ	口径 15.0 外底:コナダレナゲ・オササ 器高 2.1 内底:コナダレナゲ	常良	横7.5×97.6	白	完整	内・外底:遺物付着	001-01
6	土師部	皿	203(19C)	1区東(追加区G)	SK11634	口径 15.2 外底:コナダレナゲ・オササ 器高 1.9 内底:コナダレナゲ	口径 15.2 外底:コナダレナゲ・オササ 器高 1.9 内底:コナダレナゲ	常良	横7.5×97.6	白	口縁部/12		002-01
7	土師部	皿	203(19C)	1区東(追加区G)	SK11634	口径 15.2 外底:コナダレナゲ 残存高 1.8 内底:コナダレナゲ	口径 15.2 外底:コナダレナゲ 残存高 1.8 内底:コナダレナゲ	常良	横7.5×97.6	白	口縁部/12		002-03
8	土師部	皿	203(19C)	1区東(追加区G)	SK11634	口径 15.6 外底:コナダレナゲ・オササ 器高 1.6 内底:コナダレナゲ	口径 15.6 外底:コナダレナゲ・オササ 器高 1.6 内底:コナダレナゲ	常良	横7.5×97.6	白	口縁部/12		001-06
9	土師部	皿	203(19C)	1区東(追加区G)	SK11634	口径 15.6 外底:コナダレナゲ・オササ 器高 1.6 内底:コナダレナゲ	口径 15.6 外底:コナダレナゲ・オササ 器高 1.6 内底:コナダレナゲ	常良	横7.5×97.6	白	口縁部/12		002-02
10	土師部	皿	203(19C)	1区東(追加区G)	SK11634	口径 16.0 外底:コナダレナゲ・オササ 器高 1.8 内底:コナダレナゲ	口径 16.0 外底:コナダレナゲ・オササ 器高 1.8 内底:コナダレナゲ	常良	横7.5×97.6	白	口縁部/12		001-04
11	土師部	皿	203(19C)	1区東(追加区G)	SK11634	口径 16.0 外底:コナダレナゲ・オササ 器高 2.2 内底:コナダレナゲ	口径 16.0 外底:コナダレナゲ・オササ 器高 2.2 内底:コナダレナゲ	常良	横7.5×97.6	白	口縁部/12	内・外底:遺物付着	001-05
12	土師部	杯	203(19C)	1区東(追加区G)	SK11634	口径 15.2 外底:コナダレナゲ・オササ 器高 3.7 内底:コナダレナゲ	口径 15.2 外底:コナダレナゲ・オササ 器高 3.7 内底:コナダレナゲ	常良	横7.5×97.6	白	口縁部/12		002-06
13	土師部	杯	203(19C)	1区東(追加区G)	SK11634	口径 14.4 外底:コナダレナゲ・オササ 器高 3.3 内底:コナダレナゲ	口径 14.4 外底:コナダレナゲ・オササ 器高 3.3 内底:コナダレナゲ	常良	横7.5×97.6	白	口縁部/12		001-07
14	土師部	杯	203(19C)	1区東(追加区G)	SK11634	口径 14.4 外底:コナダレナゲ・オササ 器高 3.3 内底:コナダレナゲ	口径 14.4 外底:コナダレナゲ・オササ 器高 3.3 内底:コナダレナゲ	常良	横7.5×97.6	白	口縁部/12		001-06
15	土師部	杯	203(19C)	1区東(追加区G)	SK11634	口径 13.8 外底:コナダレナゲ・オササ 器高 3.2 内底:コナダレナゲ	口径 13.8 外底:コナダレナゲ・オササ 器高 3.2 内底:コナダレナゲ	常良	横7.5×97.6	白	口縁部/12	口縁部:破片	002-04
16	土師部	杯	203(19C)	1区東(追加区G)	SK11634	口径 14.2 外底:コナダレナゲ 器高 3.1 内底:コナダレナゲ	口径 14.2 外底:コナダレナゲ 器高 3.1 内底:コナダレナゲ	常良	横7.5×97.6	白	口縁部/12	口縁部:破片	001-03
17	土師部	杯	203(19C)	1区東(追加区G)	SK11634	口径 13.4 外底:コナダレナゲ・オササ 器高 3.0 内底:オササ	口径 13.4 外底:コナダレナゲ・オササ 器高 3.0 内底:オササ	常良	横7.5×97.6	白	口縁部/12		002-05
18	土師部	杯	203(19C)	1区東(追加区G)	SK11634	口径 13.4 外底:コナダレナゲ・オササ 器高 3.7 内底:コナダレナゲ	口径 13.4 外底:コナダレナゲ・オササ 器高 3.7 内底:コナダレナゲ	常良	横7.5×97.6	白	口縁部/12	外底:破片	002-07
19	陶器部	甕	203(19C)	1区東	SK11635	口径 30.0 外底:ナダレナゲ・丸縁 残存高 40.3 内底:ナダレナゲ	口径 30.0 外底:ナダレナゲ・丸縁 残存高 40.3 内底:ナダレナゲ	常良	横7.5×97.6	黄褐色	口縁部/12		002-01
20	陶器部	甕	203(19C)	1区東	SK11635	口径 15.6 外底:ナダレナゲ・丸縁 残存高 40.3 内底:ナダレナゲ	口径 15.6 外底:ナダレナゲ・丸縁 残存高 40.3 内底:ナダレナゲ	常良	横7.5×97.6	黄褐色	口縁部/12		006-01
21	土師部	甕	203(19C)	1区中央	SK11635	口径 27.8 外底:コナダレナゲ 残存高 15.4 内底:コナダレナゲ	口径 27.8 外底:コナダレナゲ 残存高 15.4 内底:コナダレナゲ	常良	横7.5×97.6	白	口縁部/12	外底:破片	004-01
22	土師部	皿	203(19C)	1区東(追加区G) 包含層	SK11634	口径 15.2 外底:コナダレナゲ・オササ 器高 1.7 内底:コナダレナゲ	口径 15.2 外底:コナダレナゲ・オササ 器高 1.7 内底:コナダレナゲ	常良	横7.5×97.6	白	口縁部/12		002-09
23	土師部	甕	203(19C)	1区東(追加区G) 包含層	SK11634	口径 15.6 外底:コナダレナゲ 残存高 3.5 内底:コナダレナゲ	口径 15.6 外底:コナダレナゲ 残存高 3.5 内底:コナダレナゲ	常良	横7.5×97.6	白	口縁部/12		003-01

第Ⅱ-3表 第203次調査(1区) 遺物観察表

## 5 まとめ

### (1) 飛鳥時代遺構の様相

今回の調査では、飛鳥時代の斜方位区画の南西角と南辺の掘立柱塼、掘立柱建物の柱穴を検出した。塼と建物の柱穴は、一辺約0.7mの平面形が隅丸方形を呈し、柱抜取穴が穿たれている。1区中央・東の柱穴の配置をみるとSB6292の一部に復元できる。斜方位区画内の脇殿に相当する殿舎（西第三堂）に比定され、桁行5間×梁行2間（11.7m×4.4m）の東西棟の掘立柱建物と推定される（第II-7図）。

これにより、飛鳥時代の斜方位区画内には中心建物（正殿）と外周建物（東・西脇殿各3棟）がロ字型の建物配置をとることが判明した。区画南辺の柱穴2基は重複していることから、建替えによる2段階変遷（飛鳥斎宮I期・II期）を追認できる。

斜方位区画は、飛鳥斎宮I期で東西長約38.2m×南北長約58.4m（唐尺換算で130尺×200尺）、II期で東西長約40.8m×南北長約58.4m（140尺×200尺）の規模となる（第II-8図）。これを飛鳥時代の斎宮殿域と想定している。

### (2) 奈良時代遺構の様相

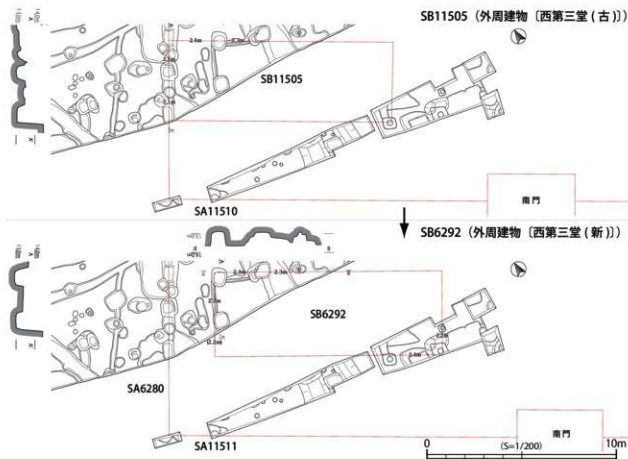
SA11633を構成する柱穴を検出したことによって、第189次調査で推定された西正方位区画北辺の延伸状況が認められた。第146・182-1・189次調査の区画東辺、第146次調査の南辺、第58-4次調査の西辺を復元すると、西正方位区画は東西長約52.5m×南北長約58.5m（唐尺換算で180尺×200尺）の規模をもつ（第II-9図）。これを奈良時代の斎宮殿域と想定している。

### (3) 平安時代遺構の様相

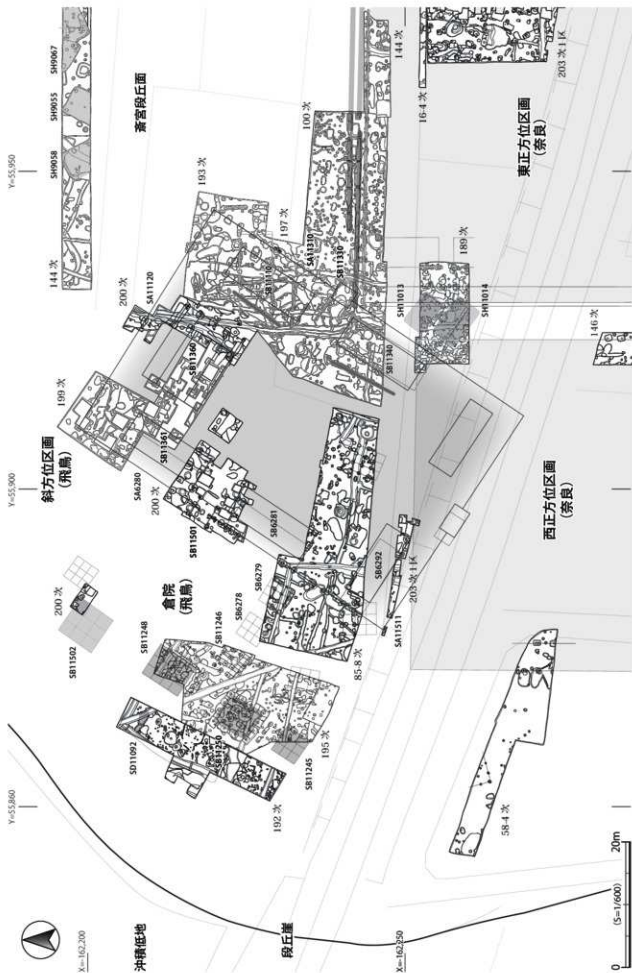
SK11634出土土器は、奈良時代の西正方位区画が廃絶した後の土地利用を示す資料となる。平安時代の方形区画と概ね同様の時期の所産であり、この施設に関連した遺構・遺物とみられる。

### 註

- (1) 斎宮歴史博物館 2023『斎宮跡発掘調査報告V 飛鳥時代の斎宮中核域の調査』
- (2) 斎宮歴史博物館 2018～2023『史跡斎宮跡 平成28年度～令和3年度発掘調査概報』
- (3) 斎宮歴史博物館 2018『史跡斎宮跡 平成28年度発掘調査概報』



第II-7図 斜方位区画の西第三堂の変遷図（1：200）



第Ⅱ-8 図 飛鳥時代の齊王宮殿域の遺構配置図 (1:600)





写真図版1 第203次調査〔1区〕



斜方位区画南西角の柱穴（東から）



斜方位区画の塙南辺 SA11510・11511（西から）



斜方位区画の西第三堂 SB6292・SB11505（西から）



1区東追加区①・② 左：SA11633 右：SK11634（東から）



西正方位区画の塙北辺 SA11633（東から）

### Ⅲ 第203次調査（2区）

#### （6AG10 中垣内地区）

#### 1 はじめに

史跡西部の段丘縁には、古代伊勢道を基点として南北へ派生する道路が敷設され、その南北道路沿いに飛鳥～奈良時代の掘立柱建物・竪穴建物の分布が確認されている。特に古代伊勢道の南では、掘立柱による方形区画が複数箇所で見られる。

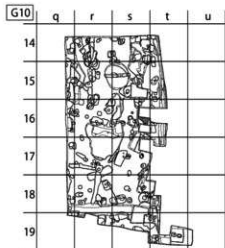
飛鳥時代は、古代伊勢道から南へ派生する直線道路の敷設軸に合わせた方位の掘立柱建物による二段階の方形区画が確認されている。方形区画はN33°Eの方位で、東西幅は第Ⅰ期は約38.2m・第Ⅱ期は約40.8m、南北は二段階とも西辺で約57.8m、東辺で約59mの規模をもつ。区画内部は北部中央に5間×2間で南北に廂を持つ東西棟の掘立柱建物をはさんで東西に、6間×2間の南北棟掘立柱建物が南北に2棟ずつ並び、その南には東西棟の掘立柱建物が存在すると想定されている。また、方形区画の西側、段丘縁には複数回の建替えを伴う大型総柱建物群を確認しており、方形区画に伴う倉院と位置付けられる。

奈良時代には、正方位を志向する掘立柱塼をめぐらす方形の空間整備が施され、その正方位区画が東西に並ぶことからそれぞれ「東正方位区画」「西正方位区画」としている。西正方位区画は昭和60年度第58～4次調査において南北に並ぶ方形土坑、そしてその東側にも柱穴が確認されていた。その後、第58～4次調査地の南において平成17年度第146次調査を実施、前調査で確認した西側の柱穴の続きに対応する柱穴が確認された。また、第146次調査では東部にも調査区を設定して調査を実施、南北方向の掘立柱建物の柱穴とその柱列が西へ折れることを確認、方形区画の南東角に当たることがわかった。その後、平成28年度第189次調査において、第146次調査東部の調査区で確認した南北方向掘立柱列の延長と、その柱列と組み合わせる東西方向の掘立柱列を確認したことからこの地点が方形区画の北東角に当

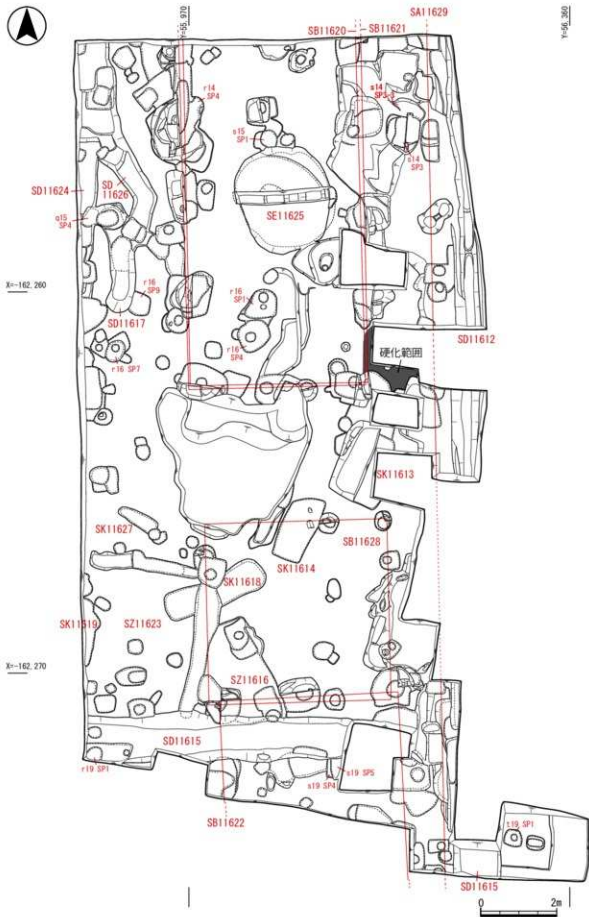
たり、この西正方位区画は南北58.5mの規模を測ることが確定された。

それに対して東正方位区画は、平成5年度第100次調査において東西方向の重複する掘立柱列が確認され、正方位を志向することから奈良時代以降の区画の存在が想定された。その後平成16年度第144次調査ではその100次調査の東側を掘削、柱列の延長を確認したが、100次調査で想定された4条の柱列と対応する柱が確認できないことから、3条の柱列が復元された。第146次調査では、第144次調査の南、近鉄線南沿いを調査したところ東西方向の柱列を確認、南北55.5mの区画が存在が想定された。その後前述の第189次調査において2条の柱列を確認、これが東正方位区画の西辺であり、第100次調査で確認していた柱穴と合わせて柱列の内部に南北棟の掘立柱建物の存在を明らかにした。第100次調査の西接した範囲を対象とした令和元年度第197次調査では、第100次調査の東西方向の柱列の延長を確認、また、区画の北西角を確認し、東正方位区画の掘立柱列による区画は2回の建替えを経て、3段階であることを明らかにした。

第203次（2区）調査地は、史跡西部の中垣内地区に所在する。帝宮段丘面（段丘中位面）の段丘崖から東へ約130mの地点に位置し、発掘調査前は畑

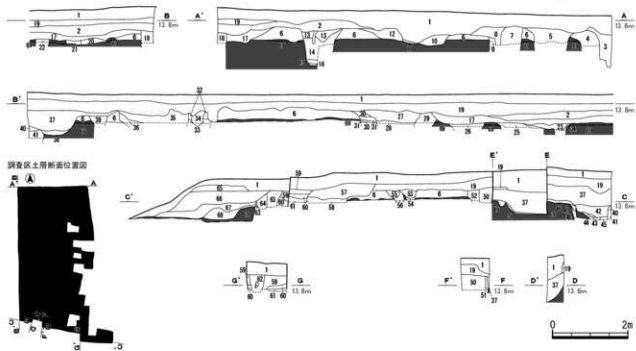


第Ⅲ-1図 第203次調査（2区）グリッド図



第三-2図 第203次調査(2区)遺構平面図(1:100)

※ SP: 建物等にまとめられないが、本図を報告で出土遺物を掲載したビット



(土層注記)

- 1 アスファルト舗装下の裏石含む
- 2 10YR2/4暗褐色シルトに円礫 (径～5.0cm) が層状に入る
- 3 10YR2/4暗褐色シルトに円礫 (径～10cm) が3層上面から10cm下までの間に多く含む
- 4 10YR2/3暗褐色シルト
- 5 10YR2/3暗褐色シルトにC2.5Y6/3黄褐色シルトブロック (径～5.0cm) が20%, 7.5YR5/4にぶい黄褐色シルトブロック (径～3.0cm) が20%, 10YR2/2黒褐色シルトブロック (径～1.0cm) が10%含む
- 6 10YR2/1黒色シルト
- 7 10YR2/3暗褐色シルトに10YR2/2黒褐色シルトブロック (径～1.5cm) が20%, 2.5Y6/4にぶい黄色シルトブロック (径～3.0cm) が20%, 7.5YR5/6明褐色シルトブロック (径～2.0cm) が10%含む
- 8 10YR2/3暗褐色シルトに土師断片を5%含む。7層ほどブロックの並びが乱れ
- 9 10YR2/2黒褐色シルトに10YR3/4暗褐色シルトブロック (径～2.0cm) が5%含む
- 10 10YR2/3暗褐色シルトに10YR4/3にぶい黄褐色シルトブロック (径～2.0cm) が5%含む
- 11 10YR2/3暗褐色シルトに10YR4/3にぶい黄褐色シルトブロック (径～2.0cm) が5%含む
- 12 10YR2/3暗褐色シルト
- 13 10YR2/3暗褐色シルトに10YR5/4にぶい黄褐色シルト・10YR6/明黄褐色シルト (地山由来) ・10YR2/2黒褐色シルトをそれぞれ径～1.0cm大の粒状で30%含む
- 14 10YR2/3暗褐色シルトに10YR5/4にぶい黄褐色シルト・10YR6/明黄褐色シルト (地山由来) ・10YR2/2黒褐色シルトをそれぞれブロック状 (径～3.0cm) が30%含む
- 15 10YR2/4暗褐色シルトに10YR5/6明褐色シルトブロック (径～5.0cm) が40%含む
- 16 10YR2/3暗褐色シルト
- 17 10YR2/3暗褐色シルト
- 18 10YR2/3暗褐色シルト
- 19 10YR2/4暗褐色シルト
- 20 10YR2/3暗褐色シルトに10YR2/2黒褐色シルトブロック (径～5.0cm) が20%, 7.5YR5/6明褐色シルト粒 (径～0.5cm) が10%含む
- 21 10YR2/3暗褐色シルトに10YR2/2黒褐色シルトブロック (径～3.0cm) が10%, 7.5YR5/6明褐色シルト粒 (径～0.5cm) が5%含む
- 22 10YR2/3暗褐色シルトにC7.5YR5/6明褐色シルト粒 (径～0.5cm) が5%含む
- 23 10YR2/3暗褐色シルトに円礫 (径～10cm) が10%含む
- 24 10YR2/4暗褐色シルト
- 25 10YR2/3暗褐色シルトに10YR4/4暗褐色シルトブロック (径～2.0cm) が1%含む
- 26 10YR2/3暗褐色シルト
- 27 10YR2/3暗褐色シルトにC2.5Y6/3黄褐色シルト粒 (径～1.0cm) が5%含む
- 28 2.5Y5/黄褐色シルト
- 29 10YR2/3暗褐色シルトに10YR2/2黒褐色シルト粒 (径～0.5cm) が5%, 7.5YR5/6明褐色シルト粒 (径～0.3cm) が5%含む
- 30 10YR2/3暗褐色シルトに10YR5/6明褐色シルトブロック (径～2.0cm) が10%含む
- 31 10YR2/3暗褐色シルト

【表土】

[S011624]

[S011624]

[S011612]

[114 SP1]

[e14 SP4]

【遺物包含層】

[e14 SP6 柱抜取]

[e14 SP11]

[e14 SP7]

【平安までの遺構か】

[S011621 柱穴1 柱抜取]

[S011621 柱穴1 遺方]

[S011624]

[S011624下の土坑状落ち込み]

[e15 ビット]

[e15 SP 1]

[e15 SP 4]

[e15 SP 2]

[e16 SP 5]

[e16 SP 3 柱抜取]

[e16 SP 3北ビット]

[e16 SP 3 遺方]

32 10YR2/3暗褐色シルト

33 10YR2/3暗褐色シルトに10YR5/6黄褐色シルトブロック (径～2.0cm) が20%含む

34 10YR2/3暗褐色シルト

35 10YR2/2暗褐色シルト

36 10YR3/4暗褐色シルトに10YR4/3にぶい黄褐色シルトブロック (径～3.0cm) が20%含む

37 10YR3/4暗褐色シルトに円礫 (径～10cm) が1%含む

38 10YR3/4暗褐色シルトに10YR5/6黄褐色シルトブロック (径～5.0cm) が20%含む

39 10YR2/3暗褐色シルトに (径～0.5cm) が5%含む

40 10YR2/3暗褐色シルト

41 10YR3/4暗褐色シルトに10YR5/6黄褐色シルトブロック (径～1.5cm) が20%含む

42 10YR2/3暗褐色シルトに10YR5/6黄褐色シルトブロック (径～2.0cm) が5%, 10YR2/3暗褐色シルトブロック (径～2.0cm) が5%含む

43 10YR5/6黄褐色シルトに10YR3/4暗褐色シルトが50%含む

44 10YR2/3暗褐色シルト

45 10YR2/3暗褐色シルトにC7.5YR5/6明褐色シルトブロック (径～3.0cm) が20%含む

46 10YR3/2暗褐色シルトに10YR4/3にぶい黄褐色シルトブロック (径～2.0cm) が5%含む

47 10YR3/3暗褐色シルトに10YR4/4暗褐色シルトブロック (径～1.5cm) が5%含む

48 10YR2/1黒色シルト

49 10YR3/4暗褐色シルト

50 10YR2/3暗褐色シルトにC2.5Y6/3黄褐色シルトブロック (径～2.0cm) が10%含む

51 10YR3/3暗褐色シルト

52 10YR3/4暗褐色シルトに10YR6/6明黄褐色シルトブロック (径～2.0cm) が20%含む

53 10YR3/4暗褐色シルトにC2.5Y6/4にぶい黄色シルトブロック (径～5.0cm) が10%含む

54 10YR2/3暗褐色シルトに10YR3/4暗褐色シルトブロック (径～3.0cm) が5%含む

55 10YR2/4暗褐色シルトにC7.5YR5/6明褐色シルトブロック (径～5.0cm) が層状に入る

56 10YR2/3暗褐色シルト

57 10YR3/3暗褐色シルトにC2.5Y6/4にぶい黄色シルトブロック (径～2.0cm) が10%含む

58 10YR3/3暗褐色シルトにC2.5Y6/4にぶい黄色シルト粒 (径～0.5cm) が10%, 10YR5/6明褐色シルト粒 (径～0.5cm) が10%含む

59 10YR2/3暗褐色シルトに10YR6/6明黄褐色シルトブロック (径～5.0cm) が10%含む

60 10YR2/3暗褐色シルト

61 10YR3/4暗褐色シルトにC7.5YR5/6明褐色シルトブロック (径～3.0cm) が5%含む

62 10YR3/4暗褐色シルト

63 10YR3/4暗褐色シルトに黄色粒10%, 白色粒10%含む

64 10YR3/4暗褐色シルト

65 10YR3/6暗褐色シルト

66 10YR2/3暗褐色シルト

67 10YR3/4暗褐色シルトに円礫 (径～10cm) が50%含む

68 10YR3/4暗褐色シルト

69 10YR4/3にぶい黄褐色シルト

[e17 SP 1 遺方]

[e17 SP 1 柱抜取]

[SK11619]

[S011615]

[r18 SP 4]

[r19 SP 1 遺方]

[r19 SP 1 柱抜取か]

[ビットか]

[S011622柱穴1 柱抜取]

[S011622柱穴1 遺方]

[e19 ビット]

[e19 SP 1 - SP 2]

[S011622柱穴6 遺方]

[S011622 柱穴6 柱抜取]

[119 SP 4 遺方]

[119 SP 4 柱抜取]

【線路上に伴う置き土か 壁く転圧される】

[S011615]

【地山】

第三-3図 第203次調査(2区) 調査区土層断面図(1:100)

地として土地利用されている。第144次調査地の町道を挟んだ南、近鉄線までの範囲を調査地として、東正方位区画の東西規模と、区画内部構造を明らかにすることを目的として調査を実施した。

これらの調査成果を受けて、東正方位区画の東西規模及び内部構造を明らかにすることを目的として第203次調査（2区）を実施した。調査期間は令和4年10月7日～令和5年3月17日、調査面積は200㎡であった。

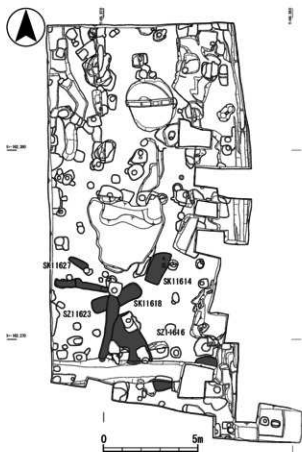
## 2 地形環境と地層

史跡齋宮跡は、紀伊山地に端を発する櫛田川（菟川）・宮川の下流域に挟まれた明野原台地の西方に位置する。後背の玉城丘陵・大仏山丘陵を基点として、そこから北へ段丘高位面（明野段丘面）、段丘中位面（齋宮段丘面）の順に地形は下降し、東西に広がる沖積低地（海岸平野・氾濫平野・三角州・後背低地）を介して、伊勢湾へと連なる。史跡齋宮跡は、段丘中位面（齋宮段丘面）に立地し、史跡西城の段丘南西部を最高所（標高14.5m程度）として、全体に東北東に向けて緩やかに下へ傾斜し、史跡の東城では標高9m程度となる。傾斜角度は1°にも達しないほどの平坦な地盤を形成している。

第203次（2区）調査地は段丘西縁に位置し、現況が畑地の平坦面で、約14mの標高を測る。基本層序は上から、耕作土、遺物包含層、地山となり、地山面までの深度は北端で約0.8m、南端で約0.7m、西端で約0.7m、東端で約0.6mを測る。調査区東側には昭和30年頃まで住民の通行に利用された赤道が走り、特に調査区南東部の拡張部分においては、その赤道上に堆積する腐植土を除去するとすぐに地山面に達する。遺構の大半は遺物包含層の上面から掘り込んでいるが、遺物包含層と遺構埋土の碎屑物構成・色調が似ており、遺物包含層面での遺構検出は困難のため、地山直上で遺構精査を行った。

## 3 遺構

調査の結果、弥生・飛鳥・奈良・平安時代、平安末～鎌倉時代、近世の各種遺構を検出した。以下、

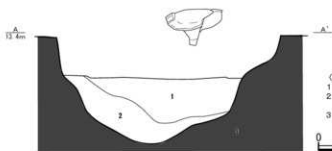
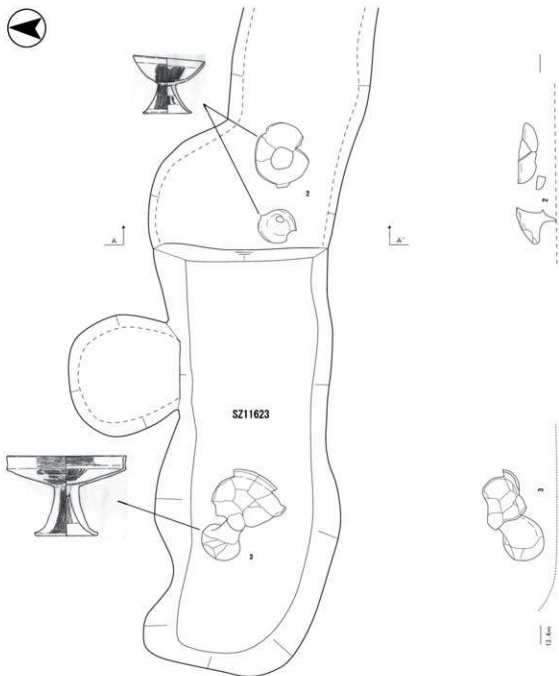


第Ⅲ-4図 第203次調査（2区）  
弥生時代遺構分布図（1:200）

検出遺構について時代毎に概観するが、遺構の全体・詳細は第Ⅲ-1・2表にまとめている。

### （1）弥生時代

弥生時代中期中葉～後葉の方形周溝墓1基・土坑2基、後期後葉の方形周溝墓1基を確認した。  
**S Z 11616** 調査区南部で確認した。墳墓中央に後世のSD 11615が掘削されているため内容は不明確であるが、西周溝と南周溝の一部を確認している。墓主軸はN25°Wである。墓規模は周溝芯々間で南北約4.2m以上・東西約4m以上である。検出面からの深さは、SD 11615の溝北肩部で確認して0.32mである。周溝幅は、西周溝は最大部で1.94m、南周溝は0.7m以上である。出土遺物は弥生土器の細片が僅かに見られるが、図化できるものはない。  
**S Z 11623** 調査区南西部で確認した。西周溝は調査区内では確認できていない。墓主軸はN8°Eである。南周溝は確認できず、SD 11615に重複すると思われる。また、東周溝はS Z 11616の西周溝に



- (土器注記)  
 1 10YR2/3黄褐色シルト  
 2 10YR2/3黄褐色シルトに10YR4/4褐色シルトブロック  
 (厚~2.0cm)が10枚含む  
 3 10YR4/3にふい黄褐色シルト【地山】

0 20cm

第Ⅲ-5図 SZ11623 土器出土状況図 (1:10)

重複し、平面観察からSZ11623東周溝が後に掘削されたものと判断した。墓規模は周溝芯々間南北4.2m以上、東西2.8m以上である。検出面からの深さは周溝北辺中央付近で0.23mである。北周溝で弥生土器高杯(2・3)が約60cm離れ、溝底面から約10cm上面で出土した。(第Ⅲ-5図)

SK11614 調査区中央付近で確認した。長軸1.75m・短軸9.0m、完掘していないが、検出面からの深さは6cm以上を測る隅丸長方形の土坑である。主軸はN21°Eである。遺構精査段階から長さ10cmと20cm程の石を確認している。出土遺物には弥生土器鉢と思われる口縁部片(4)が出土している。

SK11618 調査区南部、SZ11623東周溝に重複する土坑である。規模は、長軸2.75m・短軸0.85mで、完掘していないが検出面からの深さは6cm以上である。長軸方向はN66°Eである。出土遺物は弥生土器細片が僅かに出土する。

SK11627 調査区南西部で確認した土坑である。長軸1.1m・短軸0.4mで、検出面からの深さは13cm程度と浅い。長軸方向はN60°Wほどである。出土遺物には弥生土器壺(5)がある。

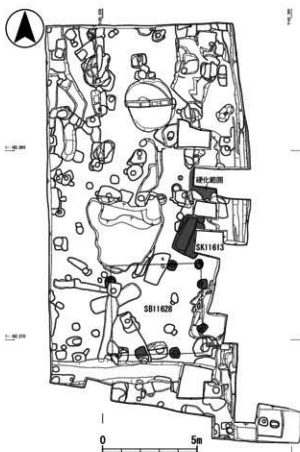
## (2) 飛鳥時代

土坑1基、掘立柱建物1棟を確認した。

SK11613(第Ⅲ-7図) 調査区中央東部で確認した隅丸長方形の土坑である。一部が立木のため掘削できていない。規模は、長軸2.2m・短軸約1.4m、検出面からの深さは0.6mを測る断面箱型状を呈する。主軸は長軸方向で見るとN22°Eである。土層断面の観察から、掘削後に埋没した後、再度掘り直しをしているようであるが、この遺構の用途は不明である。

遺構検出中に須恵器杯蓋(6)が出土したが最終埋土からの出土であり、これよりも下がる段階の遺構である可能性はぬぐえないが、その他須恵器壺口縁部(7)や細片のため図化していない遺物などに飛鳥時代より新しい時期の遺物が含まれないことから、おおよそこの段階とみてよいのではないかと。

SB11628(第Ⅲ-6図) 調査区中央付近で確認した掘立柱建物である。西側柱列が確認できず、南北方向柱列も北側柱列と南側柱列の柱位置が相対しな



第Ⅲ-6図 第203次調査(2区)  
古墳時代～飛鳥時代遺構分布図(1:200)

いが、東西3間(4.8m)×南北3間(4.3m)、面積20.64㎡の規模に復元できる。建物主軸はN1°Wとほぼ北を志向する。北東隅柱から反時計回りに柱穴1、2と番号を付した。北西隅柱とその東側の柱は近代以降の掘削が及び、南西・南東隅柱もSB11622の掘削により確認できなかった。さらに西側に柱が伸びる可能性も検討したが、対応する柱が調査区内では確認できなかったことから、西柱列は遺構の重複部分にあると想定し、3間×3間として復元した。建物の時期は、南西・南東隅柱が奈良時代の建物であるSB11622の柱穴と重複していることから、これよりも古い段階の建物と考えられる。出土遺物は、柱穴7出土の須恵器杯(24)が飛鳥Ⅲ行期期の遺物であるが、取り上げ時に掘方もしくは柱痕跡からの出土が確認していないが、先ほどのSB11622との重複関係も考えあわせ、SB11628の年代は遑つても7世紀中～後半、下つても8世紀初めと言える。



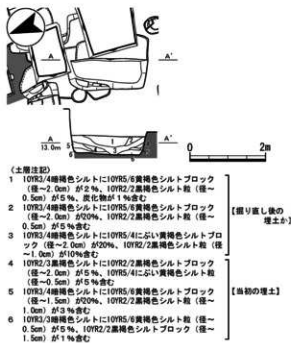
### (3) 奈良時代～平安時代前期

南北棟の掘立柱建物2棟（うち1棟は建て替えあり）、南北方向の掘立柱扉1条以上を確認した。このうち建て替えを伴う掘立柱建物は、建て替えが平安時代前期となる可能性がある。

S B 11620・11621（第Ⅲ-11図）調査区北部で確認した南北棟の掘立柱建物である。一度の建て替えが行われたことが、柱穴3・4・6・7・9の土層断面、柱穴10の平面観察で確認できる。いずれの段階の掘立柱建物においても北側柱列は当調査区内には確認できず、第144次調査で確認された柱穴がそれに対応すると見られる。しかしながら、第144次調査では平面での柱穴の重複状況が確認できないため、当調査で確認した2段階の掘立柱建物いずれの段階の北側柱列か、もしくは2段階ともほぼ同位置で北側柱列が位置したかは判断できない。仮に、第144次調査の柱列が2段階ともに対応するとし、当調査で確認した部分の柱間を当てはめると現町道下に3カ所分の柱があると考えられる。

最初の建物はS B 11620で、8間（約15.6m）×2間（4.4m）、面積68.64㎡に復元できる。建物主軸方向はN2°Wである。柱穴2において柱掘方の一部（第Ⅲ-11図B-B'）を、柱掘方の形状は柱穴3（西側柱）・柱穴10（東側柱）は方形を志向するようであるが、それ以外は第二段階のS B 11621により不明である。柱採取は、平面観察であるが柱穴8においては行われていると判断できる。柱間は2.2～2.9mで等間ではない。柱穴12は柱穴2・柱穴10の中間に位置する柱穴であり、これを梁柱としても復元できるが、その底面深さが他の柱穴よりも浅いことから、S B 11620段階の間仕切り柱と復元する。S B 11620の時期は、図化した柱穴5掘方出土の須志器杯蓋（17）や同じく柱穴5の柱痕跡出土の土師器甕（18）から飛鳥時代以降の建築、奈良時代以降の廃絶といえ、間仕切り柱とした柱穴12出土の土師器杯（19）の年代とも齟齬はない。

S B 11621は南北8間（15.25m）・東西2間（4.4m）、面積67.1㎡に復元できる。建物主軸方向はN1°Wである。柱穴はおおよそ隅丸方形を志向するようである。いずれの柱穴も柱採取が行われている。柱間は2.0～2.2mで等間ではない。S B 11620と同

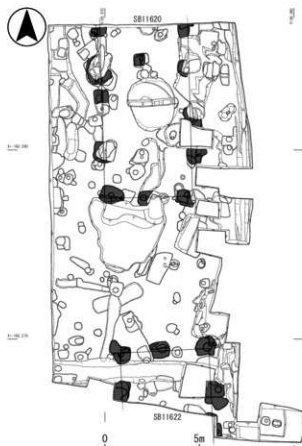


第Ⅲ-7図 SK11613 平面・土層断面図 (1:100)

様、柱穴2・柱穴10の中間に位置する柱穴13について、S B 11621段階の間仕切り柱と復元する。S B 11621の所属時期は、柱穴4掘方出土の土師器杯（12・13）から遅くとも斎宮Ⅱ-3期、9世紀後半代と考えられる。ちなみに、この土師器杯は遺構精査時からその出土を確認し、取り上げ時においても出土地点を把握できている。その他、柱穴4柱採取部出土の灰釉陶器壺口縁部（16）については9世紀後半代の時期を与えられると考えられ、この建物が平安時代前期の建築・廃絶を表すものと言える。ちなみに、前述の間仕切り柱とした柱穴13からは図化していないが土師器杯あるいは皿の口縁部片が出土しており、その時期は斎宮Ⅱ-2期に求められる。

S B 11621の柱採取痕は、にぶい黄色（あるいは黄褐色）シルト土がブロック状もしくは同様の土で充填される。

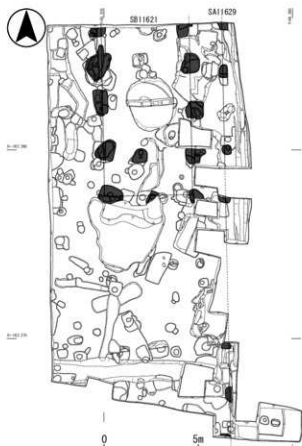
S B 11622（第Ⅲ-12図）調査区南部に位置する掘立柱建物で、その南部は調査区外へ延びる。調査区内で確認できる規模は、南北2間以上（4.8m以上）×2間（4.6m）、面積22.1㎡以上である。建物主軸方向はN4°Wである。柱穴は6カ所確認できるが、その全体形状がうかがえる梁方向の柱穴3カ所はいずれもおおよそ隅丸方形の柱掘方である。柱間は柱穴の全容が確認できる梁行で2.3mの等間となる。そして6カ所全ての柱穴において柱採取が確



第三-8図 第203次調査(2区)  
奈良時代遺構分布図(1:200)

認でき、北西隅の柱穴2は北西方向に倒し、そのすぐ南の柱穴1は大半が調査区外に広がるが柱抜取は西側に倒して行っていると考えられる。柱穴5は南東方向に引き倒している。また柱穴3・柱穴4は引き倒すのではなく、ほぼ真上に抜き取ったことがうかがえる。柱穴6も調査区土層断面観察および平面観察により、ほぼ真上に抜き取ったと考えられる。SB11622は柱の重複は見られないことから建て替えは行われなかったと考えられる。出土土器は、図化した柱穴2掘方出土の弥生土器甕(20)や柱穴1出土の須恵器杯蓋(21)、柱穴5出土の土師器杯(22)のように、斎宮I-3期までに収まる。細片のため図化できなかったものについて観察すると特に掘方出土のものはおおそ斎宮I-2期、8世紀前半代までのもので、柱抜取痕出土の土器は細片ではあるが少なくとも斎宮I-3期、8世紀中～後半代が最も新しいものであるため、SB11622の建築時期は8世紀前半～中頃と言える。

柱抜取痕にはにぶい黄色(あるいは黄褐色)シル



第三-9図 第203次調査(2区)  
平安時代前期遺構分布図(1:200)

ト土がブロック状に入る特徴がある。また、北西隅柱である柱穴2には拳大の円礫が多く充填される。SA11629 南北方向の掘立柱塼である。調査区の東部で確認したが、立木を避けながらの調査となり、また北半部は近代以降の掘削により大きく削平されているため、部分的な確認となっている。柱掘方の形状は不整形である。柱直径は平面検出で確認したのみであるが、柱穴3・南端の柱穴6から0.25～0.3cm程度と考えられる。柱穴2は上面を近代以降の掘削により大きく削平されており、平面検出で確認した柱掘方を一段掘り下げた時点で地山面に達した。その他で確認した柱穴は半截等床面までの掘削はしておらず、柱穴2の状況からSA11629の柱穴床面標高は12.8m程度と言える。柱穴2の南、柱穴3との間は近代以降の掘削で大きく削平され、その削平面標高が12.74mとなるため、掘立柱塼柱穴があったとしても削平されていると考えられる。柱間は、柱穴1と2で約2.3m、柱穴3と4で約2.5mである。この柱間を参考に削平あるいは立木によ

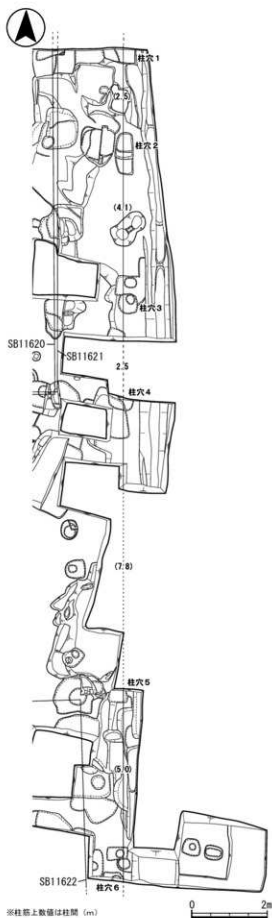
り未掘削部の柱穴の存在を推定すると、柱穴2と柱穴3の間に1カ所、柱穴5と柱穴6との間に1カ所の柱穴が推定できる。

問題は柱穴4と柱穴5の間であるが、7.8mの距離があり、柱間を2.4mとして復元すると3.0mの柱間が1カ所残る。飛鳥時代区画の調査では、区画を構成する掘立柱塼の西・東辺それぞれ1カ所ずつ門が設置されており、その部分の柱間は約3mである。SA 11629についても門が付随した可能性があるが、飛鳥時代区画のような四脚門とすればその控え柱が調査区内で確認できるはずであるが、精査の結果、控え柱の推定南側は近代以降の掘削で削平されているものの、若干の窪みがあり、その部分の標高は13.04mと掘立柱塼柱穴底標高よりも浅い。北側控え柱の推定地点は立木により未掘削部にあたると。SB 11620とSA 11629の柱位置はおおよそ対応しており、飛鳥時代区画においても南北に並ぶ2棟の南北棟掘立柱建物の間に門が設置されていたことから、SA 11629についても門が設置されていた可能性を指摘するととどめる。

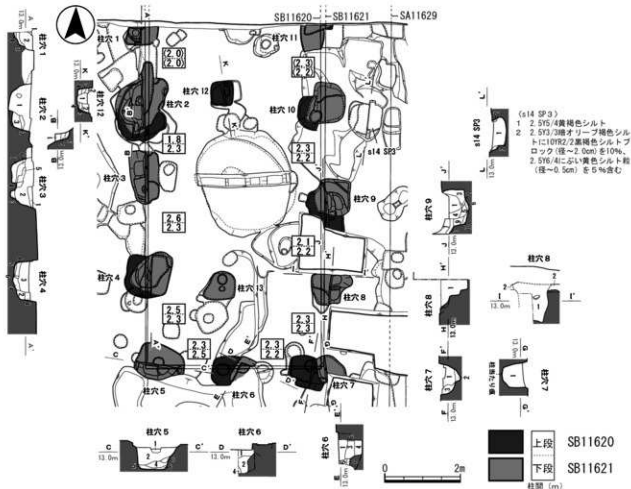
SA 11629について同位置での建て替えの有無は、柱穴の確認場所が少ないため明確には言えないが、柱穴3において柱穴の重複があることから、同位置での建て替えの可能性はある。

また、SA 11629の時期は、8世紀前半～中頃の建築といえるSB 11622と近接し過ぎていることや、柱穴2出土の土師器杯(8)の年代から、SB 11621の段階に伴う、斎宮Ⅱ-3期、9世紀後半代と考えたい。

**S14 SP 3 (第Ⅲ-11図) SB 11620・SB 11621**  
 の柱穴10の東にあるビットで、南北0.8m×東西0.85mの隅丸方形の平面形状で、検出時からその埋土は、黄褐色シルト土で充填されていた。半截により土層を確認したところ、北・東部は袋状にオーバーハングとなり、両層部にブロック混じりの暗オリーブ褐色シルト土がわずかに見られるものの、底部まで黄褐色シルト土が充填されていた。この黄褐色シルト土は、SB 11621の柱抜取痕に見られる埋土に酷似するが、それらの柱穴と同様に、このSP 3が掘立柱建物の柱穴とはその断面形状や堆積状況等から考え難い。



第Ⅲ-10図 SA11629 平面図 (1:100)



第三一四圖 SB11620・SB11621 平面・土層断面図 (1:100)

#### (4) 平安時代末～鎌倉時代、近世

屋敷地を形成すると思われる溝群がある。また、調査区全域で多数のピットが確認できることから、いくつかは掘立柱建物の柱穴と考えられるが遺構の重複が多く、建物にまとめられなかった。

**SD 11612** 調査区東端で、調査区を縦断する南北方向の溝で、第16～4次調査においても確認している。延長約18.2m・幅0.75mで断面形状は溝肩に若干の犬走り状の平坦面を持つ。調査区内ではやや弧を描いて延びる。調査区北・東壁土層断面から、溝底部から0.6m上で5～15cm程度の礫が多く堆積し、特に調査区北東隅付近ではある程度埋没した溝に敷き詰めたように見られた。溝の時期は土師器皿(53)・鍋(54)、陶器碗(55)・鉢(56)から13世紀代と考えられる。

**SD 11615** 調査区南部、東西方向に延びる溝である。延長6.8m・幅1.1～1.2m、検出面からの深さは約0.45m、断面形状は箱型を呈する。調査区

南東部、東部に拡張した部分で確認した南北方向の溝は、溝幅や断面形状が類似することからSD 11615が南へ屈曲した延長部分と推定する。底面の標高は東西方向の西端で12.96m、東端で13.06mと10cm程西へ傾斜する。ちなみに南北方向部の南端では標高12.88mである。溝の出土遺物は、図化したものは弥生時代鉢(57)や磨製石斧片(58)、古代の所産である土師器杯(59)や須恵器杯(60)などであるが、精査時に確認した他遺構との重複状況から、これら弥生時代～古代の遺物は重複する遺構の混入遺物であり、SD 11615掘削時には包含層遺物として取り上げたほぼ完形である陶器碗(159・160)、土師器鍋(161)の存在からSD 11612と同様、13世紀代の溝と考えられ、SD 11612と組み合わせると屋敷地を区画した溝と言えるだろう。

**SD 11624** 調査区西端で確認した南北方向の溝である。調査区内での規模は、延長平面検出では7.8mであるが、調査区西壁土層断面では8.1mの規模



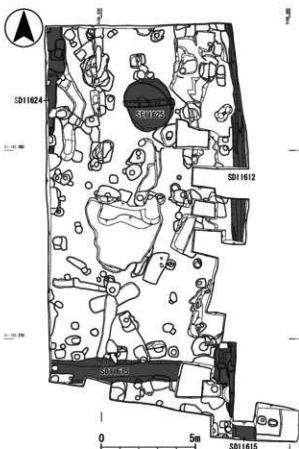
となる。溝幅は平面検出では0.82m以上、調査区北壁土層面では1.4m以上である。深さは遺構検出面からは約10cmである。遺構検出時より径0.5～1.0cm程度の礫の混じった埋土を確認しており、調査区土層の観察からも、上層から掘削されている状況が確認できた。出土遺物にはSD11624の下層遺構の混入と思われる平城I併行期の土師器皿(66)・甕口縁部(65)などがある。

**SE11625** 調査区北部で確認した井戸である。遺構検出時から直径10～20cm程の円礫が多く出土していた。規模は東西2.5m・南北2.77m・検出面からの深さは1.68m(標高11.805m)である。掘削は途中まで半截し、安全を期して中央のみをトレンチ状に底部まで完掘し土層観察を行った。平面観察においても井戸枠状構造物は確認できず、土層断面においても有機質あるいは石組み状の井戸枠は確認できなかった。木材など有機質の井戸枠が腐食により残存しなかったものと思われ、掘削当初から見られた多くの円礫は、その井戸枠上部に積み重なれた石組みの可能性もある。土層断面から、掘方部は一度掘り直されており、確認できる井戸枠埋土は掘方掘り直し後に埋没したものである。また、当初の掘方部分の底部付近は検出面から約20cm程オーバーハング状を呈する。出土遺物は、周辺の古代以降の混入遺物もあるが、13世紀～14世紀代の南伊勢系土師器鍋(46・47)や13世紀後半代の陶器椀(48・49)、12世紀後半代の陶器鉢(50)等が出土し、おおよそ13世紀～14世紀の所産の遺構と考えられる。

**SD11626** 調査区北西部に位置する、やや屈曲する溝である。他遺構の重複が多くあり全容は不明であるが確認できる規模は、北から1.7mで屈曲し、屈曲部から南端までは0.7mである。溝幅は0.55～0.65m、完掘しており7cm程度である。出土遺物には図化していないが古代に属すると思われる土師器などがある。

## 4 遺物

遺物整理用コンテナ47箱分の遺物が出土した。ここからは、遺構についての記述に合わせ、時代毎に分けて遺構毎に、遺物包含層は地区毎(北西q

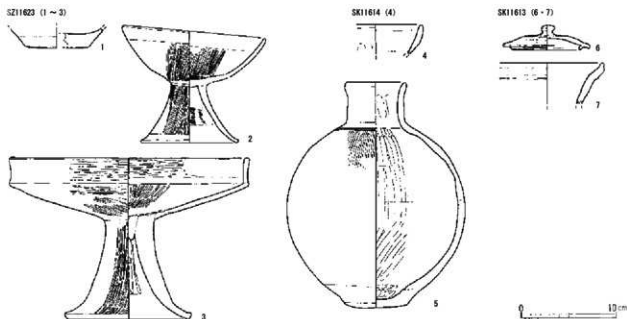


第三-13図 第203次調査(2区)  
平安時代末～鎌倉時代遺構分布図(1:200)

14-南東t19)に分けて詳述する。遺構出土遺物は、本来の遺構の年代とは異なる遺物についても調査区の遺物の状況を示すため、煩雑ではあるがまとめて掲載している。なお、ここでは特徴的な遺物のみ記述する。詳細は第三-3～6表をご覧ください。

### (1) 弥生時代遺構出土遺物(第三-14図)

**SZ11623出土遺物(1～3)** 1は弥生土器壺底部で、東周溝から出土した。底部から立ち上がるわずかに残る体部の器壁は比較的薄く、小型の壺であろうか。2・3は北周溝から出土した(第三-5図)。2の弥生土器高杯はほぼ完形で、椀状の杯部はやや傾く。杯部内外面に縦方向のミガキを、脚部も外面にミガキを施す。3は、くの字に屈曲する杯部を持つ。杯端部の残存状況は悪いが、脚部はほぼ完存する。杯屈曲部は内外面とも横方向のミガキを施し、脚部へとつながる杯部は外面は上部が横方向の、脚部に近い下部は左上がりの斜め方向のミガキを施す。内面は縦方向のミガキである。脚部も外面は縦方向の



第Ⅲ-14図 第203次調査(2区) 出土遺物実測図1(1:4)

ミガキを施す。2・3はいずれも弥生時代後期後葉の所産と考えられる。

SK 11614出土遺物(4) 弥生土器鉢のものと思われる口縁部細片である。全体をナデ・オサエにより成形・調整している。遺構は完掘していないためこの細片が当遺構の時期を示すと積極的に言えないが、埋土の状況等から当該期でよいと考える。

SK 11627出土遺物(5) 弥生土器壺である。口縁部の残存度は低い、体部から底部はほぼ完存する。体部外面には煤が付着し、調整が不明瞭であるが、肩部には縦方向のミガキを施すようである。頸部から口縁部はナデにより成形・調整し、内面ではユビオサエの痕跡が明瞭である。頸部近くの体部には4本の櫛描直線文を施す。体部内面はユビオサエ・ユビナデ痕が明瞭である。

(2) 飛鳥時代遺構出土遺物(第Ⅲ-14・15図)

SK 11613出土遺物(6・7) 6は須恵器杯蓋である。外面に降灰が見られ、正位置で竈詰めされたものである飛鳥Ⅱ型式の所産と考えられる。7は須恵器で、壺口縁部と考えられる。内面に降灰が見られることから正位置で竈詰めされたものと言える。細片のため確定できないが、おおよそ古墳時代のものか。

SB 11628出土遺物(23・24) 23は不明土製品で、全体をナデにより成形する。柱穴2から出土した。

図の左側が欠損しており、小型模造品の可能性が考えられる。24は須恵杯で、底部外面はロクロ切り離し後ナデ調整を施し、それに対応する内面に仕上げナデが見られる。柱穴6から出土した。内外面に自然軸が見られることから、蓋等をせずに正位で竈詰めされたと言える。時期は飛鳥Ⅲ併行期、7世紀中葉の所産と考えられる。

(3) 奈良時代・平安時代前期遺構出土遺物(第Ⅲ-15図)

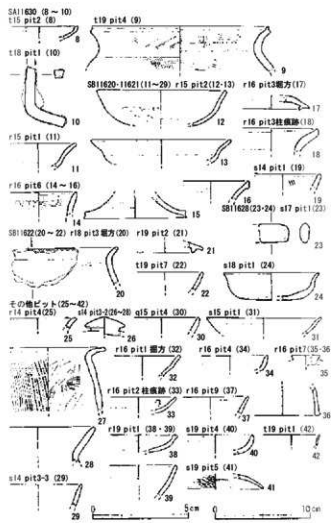
SA 11629出土遺物(8~10) 8は土師器皿の口縁部片で、柱穴2から出土した。口縁端部にやや内傾する面を持つ。斎宮Ⅱ-1期、8世紀末~9世紀初頭の所産であろうか。9は土師器甕口縁部で、柱穴6から出土した。口縁端部を上方につまみ上げる。古墳時代のものか。10は鉄製品で断面は方形を呈し、くの字に曲がる。鉄釘と思われる。柱穴5から出土した。

SB 11620・11621出土遺物(11~19・32) 11はSB 11621柱穴2の柱抜取痕から出土した土師器杯である。細片であるが、斎宮Ⅱ-3期の所産と考えられる。12・13はSB 11621柱穴4の掘方部から出土した土師器杯である。12は口縁部が11や13のように屈曲するものではなく、体部からの角度を保って広がる口縁を持つ。斎宮Ⅱ-2期でよいのか。13は11と同様、屈曲しながら開く口縁部を持つ。斎

宮Ⅱ-3期である。14～16はSB 11621の柱穴4柱抜取痕から出土しており、14は土師器甕口縁部と思われる。器壁が比較的薄いため、小型の甕と考えられる。これは斎宮Ⅰ-2期までのものか。15は須恵器高杯の脚部片で、焼成不良である。古墳時代後期～斎宮Ⅰ-1期に収まるか。16は灰軸陶器壺口縁部片で、細片のため灰軸がハケヌリかツケガケかは不明である。斎宮Ⅱ-3期の所産と考えられる。17・18はSB 11620柱穴5からの出土で、17は掘方部からの、18は柱痕跡部からの出土である。17は須恵器杯蓋で、外面に自然釉が見られることから正位で窯詰めされたと言える。飛鳥Ⅱ期併行期のものと考えられる。18は土師器甕口縁部で全体的に摩滅し調整不明瞭である。奈良時代の範疇に収まるか。

19はSB 11620の間仕切り柱と想定した柱穴12から出土した土師器杯片で、内面にヘラミガキが見られる。斎宮Ⅰ-1～2期のものか。また図版では下半部にレイアウトしているが32はこれも間仕切り柱と想定した柱穴13掘方出土の土師器杯である口縁端部でやや屈曲し、斎宮Ⅱ-2期のものか。とすると、柱穴13は二段階目のSB 11621に伴う間仕切り柱と言える。

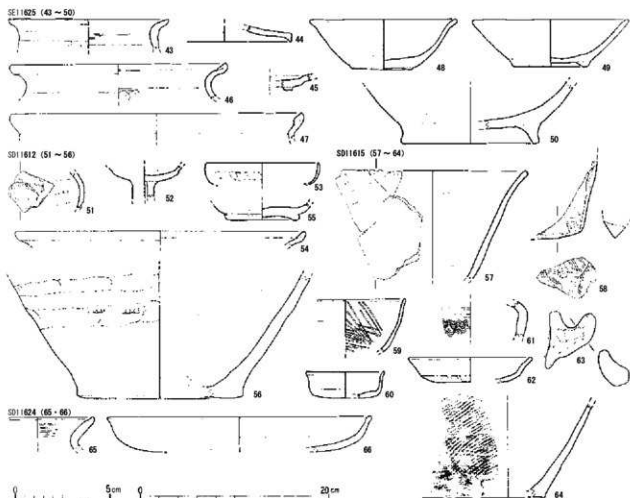
**SB 11622出土遺物 (20～22)** 20は柱穴2掘方埋土から出土した弥生時代中期の弥生土師器甕口縁部である。口縁端部に棒状工具による刻みを施す。21は柱穴1から出土した須恵器杯蓋で外面に自然釉が見られ、正位での窯詰めが想定できる。飛鳥Ⅲ期の所産か。22は柱穴5から出土した須恵器杯と思われる。その他のピット出土遺物 (25～31, 33～42) この時期に収まるものではないが、ここでピット出土遺物を見ておく。25はSB 11620・11621の柱穴2に切り込むr14 SP 4から出土した陶器小皿口縁部である。源美産の5型式後半、13世紀前半代のものである。26～29は遺構の記述でも触れた黄褐色シルトを充填するr14 SP 4から出土した。26は土師器杯蓋の摘み部である。奈良時代に収まる時期のものか。27は土師器甕で口縁部から体部にかけての外面全体に煤が薄く付着する。口縁部は強くくの字に屈曲し、斎宮Ⅱ-1期の範疇に収まるか。28は須恵器甕口縁部細片である。斎宮Ⅰ-1～2期と



第三一五図 第203次調査(2区)  
出土遺物実測図2 (10は1:2, 其他は1:4)

考えられる。29は須恵器杯口縁部細片で比較的大型のものと考えられる。斎宮Ⅰ-1期か、30はSD 11624下で検出したs15 SP 4から出土した土師器杯もしくは皿口縁部片である。細片であるが内面にミガキを施すようである。斎宮Ⅰ-1期のものと思われる。31はSE 11625の北に位置するs15 SP1出土の土師器杯で、斎宮Ⅱ-2期に収まる。33はr16 SP 2柱痕跡出土の土師器皿で、内面にわずかに螺旋状ミガキが見られる。斎宮Ⅱ-1期のものと思われる。34はr16 SP 4出土の土師器杯口縁部片で、細片であるが斎宮Ⅰ-1期の所産と考えられる。35・36はr16 pit 7から出土したもので、特に35は柱痕跡から出土した土師器杯蓋摘み部である。36は細片のため全体形状が不明であるが、須恵器蓋の可能性が考えられる。いずれも斎宮Ⅰ-2期の所産と考えられる。





第三-16図 第203次調査(2区)出土遺物実測図3 (58は1:2, その他は1:4)

37はr16 SP 9から出土した須恵器杯で口縁部細片のため時期を絞り切れないが、斎宮Ⅰ-1~3期、8世紀前半代のものか。38・39はSD11615下、調査区南西隅のr19 SP 1から出土したもので、38は土師器皿、39は土師器杯である。38はSA11629出土の土師器皿(8)と同器種と考えられ、斎宮Ⅱ-1期に属する。39の土師器杯は外面下半にヘラケズリ、内面にヘラミガキが見られるようであるが調整不明瞭である。斎宮Ⅰ-3期の所産であろうか。40はs19 SP 4出土の土師器皿で、内面にヘラミガキが施されている可能性があるが不明瞭である。斎宮Ⅰ-2~3期のものか。41はs19 SP 5出土の土師器杯蓋で、外面は斜め方向のヘラミガキ後に横方向のヘラミガキを施す。斎宮Ⅰ-2期のものである。42は調査区南東部、東へ拡張した部分で検出したt19 SP 1出土の須恵器小型壺の口縁部片と考えられる。器壁が非常に薄く、小型品と思われる、平城京左京五条二坊十四坪調査のSE3に類例を求めた。

斎宮Ⅱ-1期の所産である。

(4) 平安時代末~鎌倉時代遺構出土遺物(第三-16図)

SE11625出土遺物(43~50) 43~45はいずれも混入遺物である。43は土師器甕、44は比較的大型の須恵器杯蓋で、奈良時代以降のものと考えられる。45は灰軸陶器段皿の底部で、内面の灰軸はハケヌリと思われる。K14-2黒式、9世紀前半のものである。46・47は南伊勢系土師器鍋で、46は内外面に、47は外面に煤が厚く付着する。46は伊藤編年第1段階、13世紀前半代の所産であるが、47は口縁端部の折り返し内面がやや三角形を呈することから伊藤編年第3段階、14世紀のものである。48・49は陶器椀で、48は体部下半~底部にかけて煤が付着、内面は摩耗している。49は内面に煤が付着し、底部内面が摩耗している。口縁端部に自然軸が顕著である。いずれも底部外面は糸切後ナゲ調整、高台部に

粉痕が見られ、澁美産6型式、13世紀中～後半の所産である。50は陶器鉢で内面が摩耗する。澁美産で、中野編年I b型式、12世紀後半であろうか<sup>①</sup>。

**SD I1612出土遺物 (51～56)** 51・52は他遺構の混入と考えられる。51は土師器甕体部片で、×状のヘラ記号が見られる。52は須恵器高杯で、杯部内面は降灰が著しく、焼跡も見られる。飛鳥時代の所産であろうか。53の皿、54の鍋は南伊勢系土師器で、13世紀代の所産である。55は陶器碗底部で、内面が摩耗する。澁美産6型式と考えられる。56は陶器甕底部で、内面は降灰塊や窯崩落土と思われる土塊が多く付着する。外面にスタンプ文が見られる。常滑産であるが、全容が不明のため時期判断は困難ではあるが、スタンプ文が体部下半にも及ぶことから中野編年の5型式までの範疇、12世紀後半～13世紀後半に収まるか。

**SD I1615出土遺物 (57～64)** 遺構の記述でも触れたが、SD I1615からは当遺構より年代が遡る遺物が多く出土し、遺構の重複関係から想定する当該期の遺物は、包含層掘削あるいは遺構精査時に遺構上面で出土する程度である。57は弥生土器甕である。弥生時代中期の所産である。58は磨製石斧の刃部片で、擦痕が表裏面・側面に見られる。側面にわずかに自然面が残る。59は土師器杯で、内面は下方の横方向に近いヘラミガキの後、上方の斜め方向のヘラミガキを施す。60は須恵器杯で、外面に降灰が見られることから逆位で窯詰めされたと言える。59・60とも飛鳥Ⅱ期の所産と思われる。61は須恵器であるが、器壁が厚いことから長頸壺のような大型品の壺と考えられる。外面に波状文が施され、自然軸が見られる。内面は焼跡が著しい。飛鳥期のものか。62は土師器杯で飛鳥Ⅱ-1～2期のものである。63は土師器把手部で、オサエ・ナデにより成形・調整する。64は須恵器甕で、器壁が薄く比較的小型品であると思われる。内面に降灰が見られ、煤が付着している。平安時代の所産か。

#### (5) 遺物包含層出土遺物 (第三 - 17・18 図)

包含層出土遺物は土師器片が大半であるが、破片カウントなど数量化しての比較ではなく、整理作業時の印象ではあるが、甕などの煮炊具は少なく、杯・

皿など供膳具の破片が多い。また、調査区北部においては平安時代前期の供膳具が多く、特に斎宮Ⅱ-2～3期の、強く外反する土師器杯Aが見られ、その中には固化できていないが、口縁端部に油煙痕を持つ破片が複数点見られる。

**q 14グリッド出土遺物 (67～69)** 67は土師器甕で体部外面にわずかにハケメが残る。斎宮Ⅰ-3～Ⅱ-1期か。68は土師器把手で、全体をナデ・オサエにより成形・調整する。上部にわずかに工具当たり痕が残る。69は須恵器皿と迫われる。底部はヘラ切り後ロクロナデにより調整する。斎宮Ⅰ-2期の所産と考えられる。

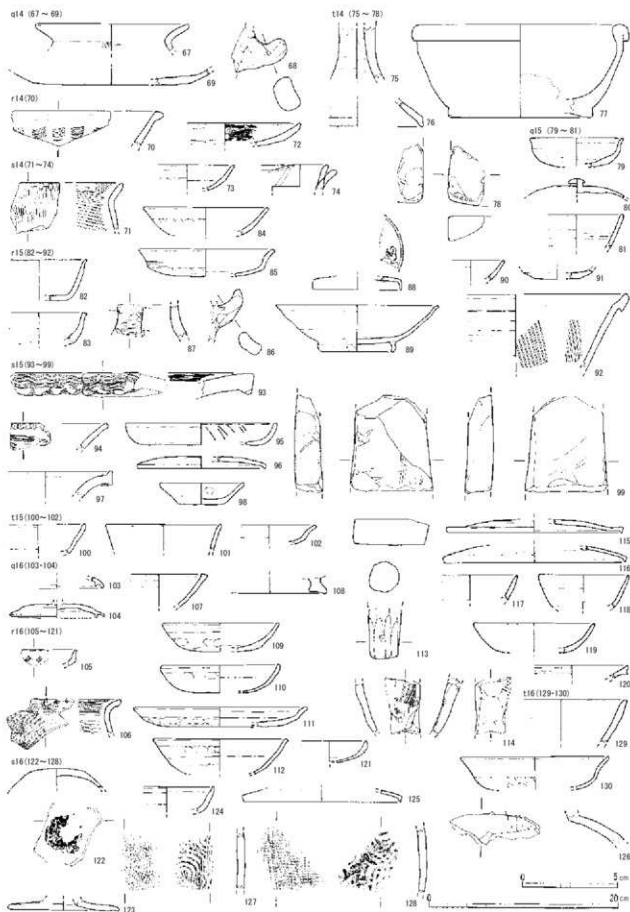
**r 14グリッド出土遺物 (70)** 70は須恵器甕口縁部で、大型甕と推定される。外面に崩れた波状文を施し、内外面には自然軸が厚く見られる。7世紀代の所産である。

**s 14グリッド出土遺物 (71～74)** 71は弥生土器甕で、口縁部には刻み目を施す。外面はタテハケ、内面はヨコハケにより調整する。外面に煤が付着している。72は土師器甕もしくは高杯と考えられる。内面は細かいハケによる調整が見られる。また、外面には黒斑が確認できる。弥生時代中期のものか。73は土師器杯で飛鳥Ⅱ-3期の所産と考えられる。74は陶器鉢口縁部で注口部に当たる。澁美産。12世紀後半代のものと考えられる。

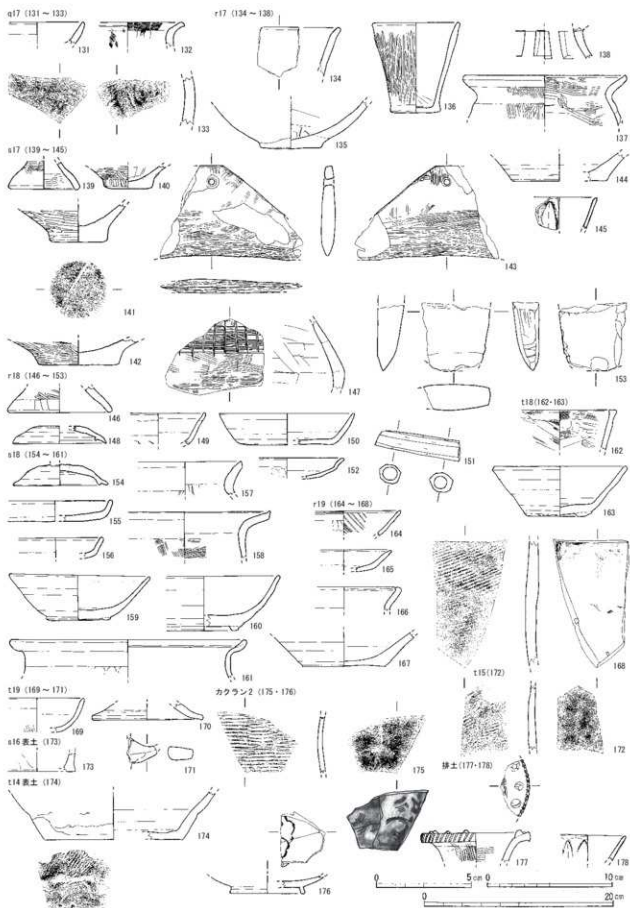
**t 14グリッド出土遺物 (75～78)** 75は須恵器壺頸部と考えられ、内外面に自然軸が見られる。76は須恵器壺脚部で、斎宮Ⅰ-1期と考えられる。77は陶器鉢で、内面は底部以外、外面は高台～底部以外に施軸する。19世紀初頭ののものか。78は土製品である。角柱状に加工したと思われるものの、残存するのは3面のみで、図の右側面の一部は研磨が見られる。図の右側面と左面との境は面取りが見られる。

**q 15グリッド出土遺物 (79～81)** 79の須恵器杯は、外面に降灰が見られ、逆位で窯詰めされたと言える。飛鳥Ⅱ-Ⅲ期の所産である。80の須恵器杯蓋は外面に降灰が見られ正位での窯詰めがなされたものと思われる。斎宮Ⅰ-1期のものである。81は須恵器杯の口縁部で、外面に降灰が見られる。奈良時代の範疇に収まるものか。

**r 15グリッド出土遺物 (82～92)** 82は須恵器杯で、



第三-17 圖 第 203 次調査 (2 区) 出土遺物実測図 4 (78・99・113 は 1:2, その他は 1:4)



第三-18図 第203次調査(2区) 出土遺物実測図5 (153は1:2, 143は1:3, その他は1:4)

内面に煤が付着する。斎宮Ⅰ-1期のものか。83は須恵器皿で、口縁端部はやや外反し、端部には外傾する面を持つ。SD 11624出土の66に類似する器種であるが、底部から体部との境に屈曲部を持つ点が異なる。斎宮Ⅰ-2～3期か。84は土師器杯で、底部から口縁部にかけてなだらかに立ち上がり、口縁端部でわずかに外反する。斎宮Ⅱ-3期のものと考えられる。85は土師器杯で、口縁部が大きく外反する。底部と口縁部との境にヨコナデにより沈線が巡る。斎宮Ⅱ-2期の所産である。86は土師器把手であるが、今回の調査で出土した他の把手と異なり、小振りの形状であるため、比較的小型の楕に伴うものの可能性がある。87は須恵器円面碗である。脚部細片で、図の両側に上下に位置をずらした方形透かしが見られる。88は緑釉陶器香炉蓋である。頂部には陰刻花文が施され、9世紀後半の所産と考えられる。89は灰釉陶器碗で、ハケヌリにより施軸する。高台部は所謂三日月状を呈し、K90-2室式、9世紀後半の所産である。90-91は白磁皿で、別個体である。90は口縁部片で内外面に施軸が見られ、外面の口縁端部近くに沈線が見られる。白磁ⅦのE期、13世紀前半代の所産と考えられる。91は底部片で内面に施軸が見られ、細片のため時期は特定できないが、90と同時代の所産と考えられるか。92は陶器播鉢で、内外面に鉄軸を施す瀬戸美濃産である。17世紀の所産である。

s 15グリッド出土遺物 (93～99) 93は弥生土器広口壺口縁部で、端部には櫛状波状文を、端部下半には刻み目を施す。内面はハケメ調整である。94は弥生土器甕と思われる口縁部で、口縁端部に刻み目を施し、外面にはハケメが見られる。93・94とも弥生時代中期中葉のものと思われる。95は土師器杯で、内面に斜め方向のヘラミガキを、外面はヘラケズリにより調整する。斎宮Ⅰ-3期のものである。96は須恵器杯蓋で、外面に自然軸が見られる。斎宮Ⅰ-1期の所産と考えられる。97は灰釉陶器壺口縁部で、内外面に灰軸が施軸されるがハケヌリかと思われる。斎宮Ⅱ-3期、9世紀後半～10世紀にかけてのものと考えられるか。98は陶器皿で、瀬美産の5型式、13世紀前半のものである。口縁部～内面に自然軸が見られ、内面にわずかに黒い

タール状のものが付着している。99は砥石で、図の上端・下端は欠損している。残存する4面は全て摺り面で、図の正面とその裏面には線状痕が残る。

t 15グリッド出土遺物 (100～102・172) 100は土師器杯で、全体に摩滅が著しい。形状から斎宮Ⅰ-3期のものと言えるか。101は須恵器杯口縁部で、やや開き気味に立ち上がる形状である。斎宮Ⅰ-1期のものか。102は土師器杯で、口縁端部が屈曲する。斎宮Ⅱ-3期と思われる。172は須恵器甕体部片を用いた転用碗である。外面はタタキが見られ、分厚い自然軸が乗る。内面は同心円文当て具痕が残るが、摺りにより摩耗している。墨痕も僅かに付着する。

q 16グリッド出土遺物 (103・104) 103・104は須恵器杯蓋で、103は頂部から口縁端部に向けて丸みを帯び、内面のカエリは端部よりもわずかに浮く形状である。外面に降灰が見られる。104は全体形状がうかがえる残存状況であるが楕円部は欠損する。内面のカエリが口縁端部よりも下に位置する形状である。外面に自然軸が見られる。細部に若干の差異はあるがいずれも飛鳥Ⅲ期に収まるものであろうか。

r 16グリッド出土遺物 (105～121) 105は弥生土器小型鉢の口縁部片と思われる。口縁端部から頭部にかけての屈曲部に刻み目を施す。弥生時代後期のものか。106は弥生土器甕で、内面全体と外面にヨコハケ、口縁部外面はタテハケ後ヨコハケにより調整し、口縁端部には刻み目を施す。外面に煤が付着する。弥生時代後期後葉である。107は土師器の、やや大型の杯である。斎宮Ⅰ-2期の所産である。108は土師器盤の高台部と思われる。橙色で緻密な胎土を持つ。斎宮Ⅰ-2期のものである。109・110は土師器杯で、いずれもオサエ・ナデにより成形・調整される。口縁部形状が109はやや外反し、110は丸みを帯びながら立ち上がるという差異はあるものの、おおそ斎宮Ⅱ-1期に収まるものと考えられる。111は土師器皿で、全体をオサエ・ナデにより成形・調整する。外反する口縁部を持ち、斎宮Ⅱ-1期の所産と思われる。112は土師器杯で、前述の109・110に比して深手で、斎宮Ⅱ-3期のものと思われる。113は不明土製品で、側面は図の上部に面取りした後、下部に面取りにより成形する。下面はナデによりやや丸みを帯びた面を持つ。上部が欠損して

おり、何らかの器物の脚部と思われる。114は土師器で移動式甕の破片と推定する。図の左面を外面として、その面はハケメによる調整、内面はオサエ・ナデ、僅かにハケメ状の線刻が残る。側面には面を持つ。上端・下端は欠損している。器壁は薄手であることから、移動式甕であるとしたら小型品と言える。115・116は須恵器杯蓋である。115は口縁部付近にのみ降灰が見られることから、上部に別個体を重ねて窯詰めしたものと推定する。116は残存する外面全体に降灰が見られる。115は頂部から口縁部にかけてやや屈曲し、ロクロケズリの範囲も比較的狭く、116は頂部からなだらかに口縁部へ到り、ロクロケズリも口縁部まで施すという差異はあるが、時期はおおよそ斎宮Ⅰ-1期新段階～3期、すなわち奈良時代の範疇か。117～119は須恵器杯である。117は細片のため全体形状を復元できないが、比較的器壁は厚く、端部に細くつまみ上げて取る。斎宮Ⅰ-1期か。118は117に比べて薄手で、残存部では全体をロクロナデで成形し、口縁端部はやや内傾する。斎宮Ⅰ-2期のもの。119は底部付近にロクロケズリを施すため、口縁部と底部との間がわずかに屈曲する。口縁部から体部外面に降灰が見られることから逆に、上部に別個体を重ねて窯詰めしたと思われる。斎宮Ⅱ-2期のもので、平安京右京三条四坊二町SK10に類例が見られる。120は灰軸陶器壺の口縁部である。口縁部下半に僅かに無軸部分がある。斎宮Ⅱ-3期のものである。121は土師器杯で全体をオサエ・ナデにより調整し、端部をヨコナデで仕上げる。斎宮Ⅲ-2期の所産である。

**s 16 グリッド出土遺物 (122～128)** 122は須恵器杯H蓋を用いた転用甕である。研磨は弱い、墨痕が残る(写真図版5-122)。須恵器自体の時期は飛鳥Ⅰ～Ⅱ期に収まるものと思われる。123は土師器高杯脚部で、端部はヨコナデ、外面はオサエ・ナデで、内面はナデにより成形・調整する。斎宮Ⅱ-3期のものであろうか。124は土師器杯で、底部外面にヘラケズリを施す。斎宮Ⅰ-1期新か。125は須恵器杯蓋で、口縁部付近のみの残存であるが外面に僅かにロクロケズリが確認できる。焼き態れが多数あり、外面と頭部内面には自然軸が見られる。ま

た外面に降灰が見られる。斎宮Ⅰ-2期～3期新段階までに収まるか。126は須恵器樽形の体部片で、頸部への立ち上がりがわずかに確認できる。外面は図の右側にロクロケズリが確認できる。これのみで時期を判断するのは難しいが、斎宮Ⅰ-1期新段階～3期、つまりおおよそ奈良時代の範疇と見てよいか。127・128は須恵器甕体部片である。外面はタタキ、内面は同心円文状当て具痕が見られるが、127は当て具痕の後にハケが施される。

**t 16 グリッド出土遺物 (129・130)** 129は須恵器鉢で、口縁部と外面に自然軸が見られる。細片のため時期決定は難しいが、平安京左京一条三坊十一町、立会17井戸1出土遺物に類例があり、10世紀後半代の所産と考える。130は土師器杯で、口縁部が屈曲しながら開く形状を持つ。斎宮Ⅱ-3期の所産である。

**q 17 グリッド出土遺物 (131～133)** 131は土師器杯口縁部片である。斎宮Ⅰ-1期のものか。132は土師器甕口縁部片で、直立気味の体部からくの字に曲がる短い口縁部をもつ。古墳時代の小型の甕であろうか。133は須恵器甕体部片である。外面はタタキ、内面は同心円文状当て具痕が見られるが、内面全体が摩耗し、特に図の下半部が強く摩耗する。ループで墨痕付着の有無を確認したが残存部では墨痕は確認できなかったが、ここでは転用甕の可能性のあるものとして掲載した。

**r 17 グリッド出土遺物 (134～138)** 134は弥生土器甕と見られ、ナデ・オサエにより成形・調整する。135は弥生土器壺底部で、内面はヘラケズリが見られ、底部には工具当たり痕が明瞭である。外面はナデにより成形・調整する。弥生時代後期か。136は弥生土器小型鉢である。外面はヘラミガキにより調整し、内面上半はナデ、下半はヘラケズリ調整である。これについても弥生時代後期と考えてよいか。137は土師器甕で、口縁部から体部にかけて煤が付着する。斎宮Ⅰ-1期の所産である。138は須恵器円面甕の脚部である。長方形透かしを残存部では2カ所あく。

**s 17 グリッド出土遺物 (139～145)** 139は弥生土器脚付壺の脚部と思われ、外面をハケとヨコナデ、内面をハケとナデにより成形・調整する。140～

142は弥生土器壺の底部である。外面はヘラミガキを施し、内面は140は工具ナデの痕跡が、141・142は摩耗が著しいがナデによる調整が施される。141は底部付近に黒斑があり、体部に煤が付着している。また、底部にはモミ圧痕がみられる。143は石包丁である。おおよそ全体の3分の1が欠損しているが、孔は当初から1カ所であると考えられる。刃部は両刃である。上面・側面も研磨された面を持ち、表・裏面とも研磨による擦痕が見られる。特に刃部では横方向の擦痕は明瞭で、実際の使用を示すと思われる刃こぼれが多数確認できる。大型石包丁について論じた櫻井拓馬氏によると、弥生時代後期の「当地域（南勢地域・山中が補足）の石包丁との比較から、刃～背部の幅が6cm、厚さ1cmを大きく超えるものは、大型石包丁と認定することが可能」とのことである。今回出土した石包丁は刃～背部の幅が7.5cm以上、厚さは1.1cmであり、大型品としてよいかと考える。また背から刃までの平面形は括れないことから「無側」に分類できる。144は陶器鉢で渥美産のものと思われる。底部のみであるので時期の判断は難しい。145は青磁椀である。外面に連弁の陰刻が見られる。龍泉窯系で、13世紀前半の所産と思われる。

**r 18グリッド出土遺物 (146～153)** 146は弥生土器台付甕での台部と思われる。外面上半はやや右下がりのヘラミガキが、下半は板状工具の横方向のナデが見られる。147は弥生土器壺の体部である。外面は横方向のハケの後、上半は簾状文を施す。弥生時代中期の所産である。148は須恵器杯蓋である。全体をクロコナデで成形する。また、外面に降灰が見られることから、正位で窯詰めしたものと言える。飛鳥Ⅱ～Ⅲ期の所産と考えられる。149は土師器杯で、粘土接合痕が顕著である。細片のため時期の特定は難しいが、斎宮Ⅰ-1期と考えてよいか。150は須恵器杯である。底部はヘラ切り後ナデ調整を施し、体部外面～内面はクロコナデ成形である。口縁部～底部外面に降灰が見られることから、逆位で窯詰めされたと言える。斎宮Ⅰ-2期の所産と思われる。151は須恵器水注の注口部である。体部に接続する部分は欠損しており、まだわずかに伸びる可能性はあるが、注ぎ口先はほぼ残存している。棒状具

に粘土を巻き付け、ヘラケズリにより成形し、9面の面を持つ。このヘラケズリの方向は同方向ではないが、1面中では一定の方向でケズリを施す。本例のような長い注口部を持つ例を検索できていないが、おおよそ斎宮Ⅱ-1～2期、9世紀前半代の所産と考えられる。152は土師器杯で、口縁部は僅かに外反する。斎宮Ⅱ-2期のものである。153は小型の磨製石斧である。図の右側面と上部が欠損する。両刃であり、側面に僅かに擦痕が見られるものの、全体に擦痕は見られない。

**s 18グリッド出土遺物 (154～161)** 154は須恵器杯蓋で摘みは欠損している。外面は自然軸が厚く付着し調整不明瞭である。飛鳥Ⅱ期か。155・156は土師器皿で、155底部外面はナデ・オサエ、内面はナデにより調整する。内面に線刻状の刻みが見られるが、意図的なものではないと判断した。斎宮Ⅰ-2期の所産と思われる。156は155に比して器壁が薄く、口縁部もやや外反することからやや時期は下がり、斎宮Ⅰ-3期中～新のものだと判断した。157・158は土師器甕で、157に比して158は口縁部が強く外反する特徴がある。このことから、158の方が若干新しい時期のものと考えられ、157は斎宮Ⅰ-1期、158は斎宮Ⅰ-2期と推定した。159・160は陶器椀である。159は底部内面が摩耗する。160は口縁部から内面にかけて自然軸が見られ、細片のため摩耗の状況は確認できない。いずれも渥美産の5型式後段階～6型式、12世紀前半代と思われる。161は南伊勢系土師器鉢で、内外面に煤が付着する。伊藤編年第一段階、13世紀前半代の所産と考えられる。

**t 18グリッド出土遺物 (162・163)** 162は弥生土器の鉢の口縁部と考えられる。内外面に工具によるナデ調整痕が確認できる。163は陶器椀で、口縁部～内面にかけて自然軸が付着する。摩耗の状況は確認できない。胎土等の特徴から知多産の6型式、12世紀前半代の所産と考える。

**r 19グリッド出土遺物 (164～168)** 164は土師器杯で、内面に斜め方向のヘラミガキを施す。口縁部外面には1条の沈線が巡る。斎宮Ⅰ-2期の所産と考えられる。165は土師器杯で、口縁部がやや外反する。斎宮Ⅱ-2期のものである。166は土師器甕口縁部で、端部は内側に倒しながら丸くおさまる。

斎宮Ⅱ-1期新〜2期のものであろうか。167は須恵器鉢底部である。底部はヘラ切り離し後不調整である。体外外面・内面ともクロコナデにより成形・調整する。底部のみのため時期の判断が難しいが、斎宮Ⅰ-2〜3期のものか。168は須恵器甕体部片を用いた転用碗である。外面はタタキ調整、内面は研磨のため調整不明であるが、モミ殻圧痕と思われる窪みが確認できる。研磨は全体に渡り、図の上部に墨痕が明瞭である。墨痕付着部の割れ面に墨痕が見られないことから、本来は碗としてはもう少し大きかったと言える。

t 19グリップ出土遺物 (169〜171) 169は土師器杯で底部外面に僅かにハケが見られる。古墳時代から続く系統の杯であり、時期も飛鳥時代までに収まるものと思われる。170は土師器高杯脚部で、当調査区の北西、第197次調査で複数出土した古墳時代の高杯に類似する。古墳時代中期、辻編年 第4段階、陶邑編年TK23〜TK47型式併行期のもと思われる。171は土師器把手であり、小型の甕のものと思われる。

#### (6) その他 (第三〜18図)

表土出土遺物 (173・174) 表土からの遺物はさほど多くない。173は志摩式製塩土器である。174は須恵器壺底部と思われる、体外外面の上半にタタキが、下半にクロコケズリを施す。内面はナデ、オサエにより調整する。平安時代前期のものか。

攪乱部出土遺物 (175・176) 175はSB11620・11621の柱穴6に及ぶ攪乱土坑から出土した須恵器甕体部を用いた転用碗である。比較的薄手の甕で、外面にはタタキ、内面には同心円文状で具痕が見られるが、研磨により不明瞭である。濃淡はあるもののほぼ全体に墨痕が見られる。割れ面に墨の付着が見られず、研磨が破片の際まで及ぶことから、本来転用碗として利用した破片は更に大きいものと言える。176はSB11621の間仕切り柱の可能性を想定した柱穴13の南辺を削平する攪乱溝から出土した、緑釉緑彩陶器碗である。内面に緑釉より花卉を描いている。9世紀代の所産である。

排土出土遺物 (177・178) 177は弥生土器壺口縁部である。内面に瘤状突起が3カ所確認できる。口

縁端部には櫛状工具による刺突文が施される。弥生時代中期のものである。178は青磁碗で、外面に編蓮弁文が陰刻される。龍泉窯系で、13世紀前半代の所産である。

## 5 まとめ

### (1) 各時代の遺構変遷

第203次(2区)調査区では、遺構としては弥生時代中期中葉〜後期、飛鳥時代、奈良時代、平安時代前期、平安時代末〜鎌倉時代のもので確認でき、遺物はそれらに加えて、古墳時代中後期、近世が出土している。それぞれについて簡単に触れていく。

#### ①弥生時代

中期中葉のSZ11616と後期となるSZ11623は出土遺物の時期もあるが、遺構が重複することによりその時期差を捕えることができた。その他、規模や形状は異なるが長方形土坑3基確認している。周辺調査歴で見られるように本調査地周辺は中期中葉の墓域と認識されており、SZ11616はその範囲に収まるが、今回新たに後期の墳墓が確認されたことで、継続的に墓域として認識されていたことを示す。また、遺物包含層から出土した大型石包丁の存在は、近在に集落が存在する可能性を示す<sup>⑩</sup>。

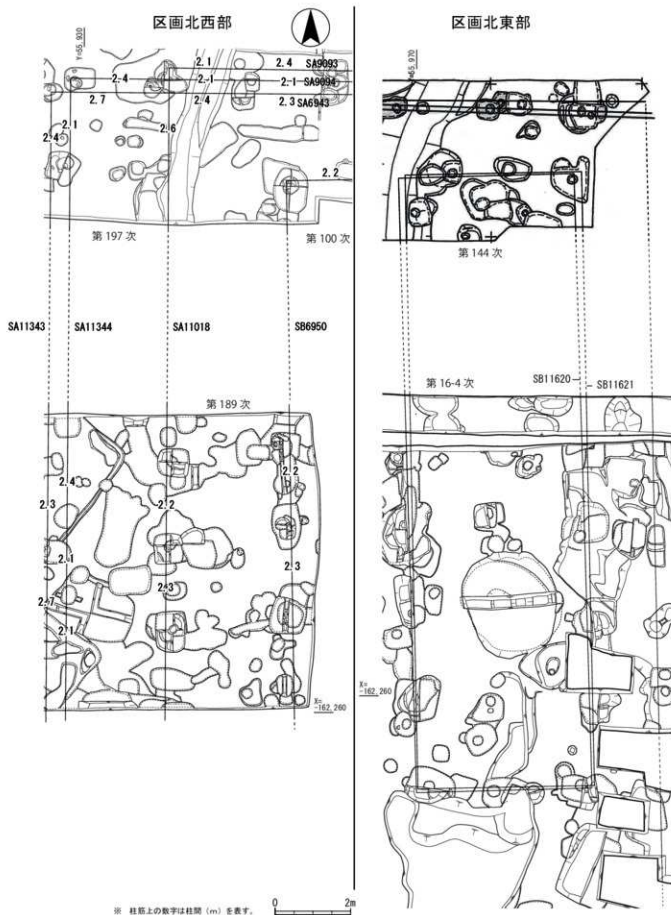
#### ②古墳時代後期

遺構は確認されていないが、第197次調査において出土した土師器高杯と同時期の高杯脚部が出土した。第197次調査では、古墳時代中期の方形土坑や壑穴建物の確認、土師器高杯の複数出土や勾玉形・剣形の石製模造品が出土しており、今回の調査区附近も、段丘縁辺部で行われた祭祀行為の影響下にあったと考えてよいだろう。

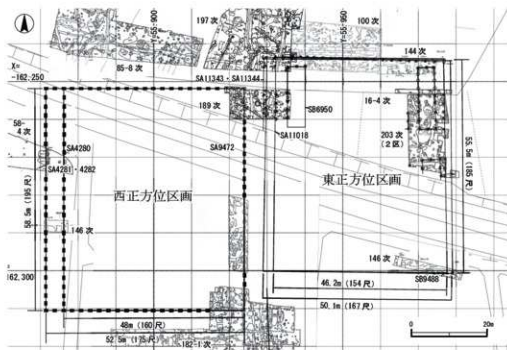
#### ③飛鳥時代

SK11613は主軸方向がN22°Eで、飛鳥時代方形区画の主軸方向N33°Eとは異なるが、区画から離れていることもあり、さほど規制されていないと考える。これはSB11628も同様で、遺構重複関係や出土遺物からこの段階の遺構と考えざるを得ないが、小型柱穴の建物であるのでさほど規制をされておらず、周辺にはこのような小型掘立柱建物が点在していたと考えてよい。また、須恵器杯蓋を用いた転





第三一—19図 調査区北西・北東部の掘立柱塼・掘立柱建物 平面図 (1:100)



第三一20図 中垣内地区における正方位区画 (1:1,000)

用硯(122)の出土も、当地での活動をうかがえる。

④奈良時代

S B 11620とS B 11622が南北に並ぶことが分かった。しかし、東正方位区画の東を区切る掘立柱堀は今回の調査区内には存在しない。建物以外の遺構については確認できていないが、平安時代に下る可能性もある円面硯や転用硯の出土等から、公的施設の建物と言えらう。

⑤平安時代前期

奈良時代の建物であるS B 11620の位置をほぼ踏襲して建てられたS B 11621とその東側のS A 11629がある。これらから、東正方位区画には平安時代前期にも機能したことが分かった。出土遺物には、S B 11621が位置する調査区北部で遺物包含層からの出土であるが土師器杯の油煙痕の見られる破片が比較的多く出土し、また、奈良時代の判別が困難ではあるが円面硯2片や須恵器甕体部を用いた転用硯3点の出土など、より実務を伴う公的施設として機能していたものと考えられる。緑釉陶器香炉蓋や緑釉緑彩陶器の出土など、史跡東部の方格街区などの調査成果とも共通する。

しかし、8世紀末、光仁朝に史跡東部へと移動し、9世紀前半に離宮院へ移転しながら再度多気郡へと移転したとされる史跡東部の斎宮との関連は今後の

課題である。

⑥平安時代末～鎌倉時代

S D 11612とS D 11615により区画する屋敷地としての様相を示す。掘立柱建物の柱穴は重複する遺構も多く検討できていないが、S E 11625もあり、一般的な集落としての様相を示していたと考える。それは南勢地域で一般的に出土する南伊勢系土師器鍋等の出土からうかがえる。

⑦近世

隣接する調査地のように、遺物包含層も含め当該時期の遺物はほとんど見られない。陶器鉢(77)もあり、当該時期の活動の中心からは外れていたと言える。

(2) 東正方位区画北東部の構造

今回確認した東正方位区画の北東部の構造を、北西部での調査成果と比較しながら見ていく。

北西部角の調査では、それぞれ柱穴の重複関係を明らかにした。また、北西部に南北棟の掘立柱建物S B 6950を確認している。S B 6950は第189次調査では南北柱列が確認されており、が、この建物は建替えについては不明であり、どの段階の掘立柱列に伴う建物かは不明である。とりあえずここでは、このS B 6950を掘立柱列の位置を論じるための基

準として位置づける。

#### ①第一段階

東西方向 S A 9093・南北方向 S A 11018 の柱列で、S B 6950 の北梁行と S A 9093 間は約 2.85m (9.5 尺)、S B 6950 の西側柱列と S A 11018 間は約 3.3m (11 尺) である。掘立柱列の柱穴は S A 9093 は柱穴が重複するため全体形状は不明であるが、南北方向の S A 11018 は一辺約 0.8m の隅丸方形を呈し、柱底の標高は 13.15m である。

#### ②第二段階

東西方向 S A 6943・南北方向 S A 11343 の柱列で、南北方向の柱列は第一段階から西へ約 3.15m 移動する。東西方向は南へ約 0.6m ずれる程度である。S B 6950 の北梁行と S A 6943 間は約 2.25m (7.5 尺)、S B 6950 の西側柱列と S A 11343 間は約 6.3m (21 尺) である。掘立柱列の柱穴は S A 9093 では一辺約 0.5m の楕円形状に近い長方形、南北方向の S A 11343 は一辺約 0.6m の隅丸長方形を呈し、柱底の標高は 13.0 ~ 13.1m である。

#### ③第三段階

東西方向 S A 9094・南北方向 S A 11344 の柱列で、南北方向の柱列は第二段階から東へ約 0.5m 移動するが、ほぼ同位置を踏襲していると言えるだろう。東西方向も北へ約 0.35m ずれ、これもほぼ同位置を志向している。S B 6950 の北梁行と S A 9094 間は約 2.6m (約 8.7 尺)、S B 6950 の西側柱列と S A 11344 間は約 5.8m (約 19.3 尺) である。掘立柱列の柱穴は S A 9094 では一辺約 0.5 ~ 0.8m の長方形、南北方向の S A 11344 は一辺約 0.6m の隅丸方形や円形に近い形状を呈する。柱底の標高は 13.2m である。

以上の検討から、

- ・第二段階において西へ拡張していること
  - ・第三段階はほぼ同位置に建替えていること
  - ・柱穴形状は第一段階が比較的大型であり、形状も整える傾向があるが、第二段階以降は柱穴も小さくなり、形状も揃わない。
- ということが言える。

### (3) 東方位区画の構造復元

東方位区画は北西部の調査成果から、掘立柱塼

は 2 回の建替えが行われ、3 段階であったことが分かっている。今回の調査で、少なくとも平安時代前期、9 世紀後半代にこの正方位区画が営まれていた可能性が浮上した。

8 世紀前半代には、S B 11620・S B 11622 が脇殿状に配置される。S B 11620 に対応する区画北西部には S B 6950 が位置し、この S B 6950 は同様に 8 間×2 間の建物の可能性がある。また、南北方向の掘立柱塼は西側は S B 6950 から約 3.3m の間隔で設置され、それと東側も同様と考えると、当該時期の東掘立柱塼は調査区外にあり、当調査の南東部の拡張部分で確認した 2 カ所のピットのいずれかがその柱穴と考えられる。

また、S B 11620 の西、調査区壁際では、黄褐色土を充填される柱穴と抜取穴を確認している。この柱穴は、S B 11620 に隣接する建物のものと考えられ、その位置は S B 11620 の南梁行柱と筋が揃い、南東隅柱との間隔は約 3m である。

9 世紀後半代には、区画北東部では S B 11621 と約 2m の間隔で S A 11629 が設置される。北西部で確認した掘立柱塼と建物と同じ間隔ではなく、飛鳥時代から少なくとも 8 世紀前半代まで見られた対称的配置はこの時期にはとられていないのかもしれない。

補足として、飛鳥時代方形区画でも特徴的であった柱抜取痕に充填される「白色土」(黄褐色土)について簡単に触れる。これまでの調査で、この「白色土」は飛鳥時代 1 期の柱抜取痕に混入するが掘方には入らない。そして、2 期の掘方にはブロック状に入り、柱抜取にも入ることが分かっていた。また、第 197 次調査で確認した正方位(奈良時代)の遺構では、調査区北部の S B 11342・11345 では掘方にも抜取痕にも白色土が充填されるが調査区南部の奈良時代掘立柱塼群や S B 6950 では柱抜取痕にのみ白色土は入り、掘立柱塼と並行する S D 6950 の最終埋土にも確認できる。以上の状況から、白色土は飛鳥時代 1 期遺構の廃絶段階には存在し、奈良時代の遺構から、調査区北部では白色土の分布は濃厚で、調査区南東部では少ないことから、飛鳥時代の遺構に伴うものが正方位の遺構に混入したものと考えていた。しかし、今回、飛鳥の方形区画から離

れた当該調査区の掘立柱建物においても柱抜取痕等からこの白色土が見られることから、奈良時代、また平安時代前期の建物においても、白色土が何らかの構築物として当地点に持ち込まれていたと考えてよいだろう。

今回の調査では、東正方位区画の奈良時代における東西規模を明らかにすることはできなかった。しかしながら、飛鳥方形区画と同様、南北棟の建物が

並列することが確認でき、主軸方向を変えつつも、区画内の構造は前代を踏襲したことが分かった。

また、平安時代前期の掘立柱建物と塀を確認したことで、史跡東部の方格街区との関連の有無等、新たな課題が発生した。これまでの東正方位区画に関わる調査成果や出土遺物を再検討・整理することにより、史跡西部における平安時代の様相についても明らかにする必要がある。

① 中野『中世の土器』1995

② 櫻井拓馬 2023 「弥生時代後期以降に残存する大型石包丁とその評価」『Mie history』Vol.30 三重歴史文化研究会

③ 辻美紀 1999 「古墳時代の中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学—大阪大学考古学研究室10周年記念論集—』大阪大学考古学研究室

④ 前掲註2 櫻井2023：8ページより。

遺構名	調査時遺構名	グリッド	長軸	短軸	築成・床層	柱土	時期	出土遺物	備考	
SD11612	溝	114・115・116・117	東西3.6m 南北4.6m	幅0.5~0.8 14cm	完掘	E	円隴型	土師器皿・壺、須恵器杯蓋		
SK11613	土坑	2 115・117	1.5m	0.7m	5.5cm	半掘	B/F	飛鳥か	土師器壺片1片のみ	
SK11614	土坑	3 117	20.2m	幅0.94~1.4m	17.7~17.5cm	未掘	A	弥生	弥生土器、円蓋椀、陶磁器・瓦、土師器鉢・壺、鉄製品包丁	
SD11615	溝	4 a16・r18・s19・q19・r19		幅0.4m	0.8m	5.5cm	完掘	E	古墳~奈良	土師器壺片
SZ11616	溝	5 s19	3.7m	幅0.95m	0.6m		未掘	A	飛鳥	弥生土器ピアマダ
SD11618	溝	6 r17・r18	2.2m	幅0.3~0.45 m	4cm		未掘	A	飛鳥・奈良	土師器杯片
SK11619	土坑	7 a18	2.2m	0.9m	22cm		未掘	A	鎌倉	土師器小皿片
SZ11623	溝	8 r17・r18	東西6.4m 南北5.8m	幅0.3~0.65 m	15~22cm		未掘	A	近世	青磁、弥生土器、土師器埴輪、
SD11624	溝	9 r14・q15・s15	1.6m	1.2m	23cm		未掘	E	円隴型	古墳~古代
SE11625	土坑	10 r15・s15					一部新掘	E	円隴型	割石土製埴輪、土師器高杯・甕体壺片
—	溝	11 r15	2.2m以上	1.84m	9cm		未掘	A	古墳	土師器高杯胴部・甕体部
—	溝	12 a15・r15・q16・r16					未掘	F	砂濺	
—	溝	13 r14	12.6m	58~71cm	9~22cm		未掘	C	自強め	近世
SD11626	溝	14 a15・r15	5m以上	1.9m以上	4~6.5cm		完掘	A	弥生	土師器鉢蓋
SD11617	溝	15 a15・r15・q16・r16					未掘	B・F	砂濺	
—	溝	16 q17・r17					一部完掘	A		
SD11627	溝	17 r17					?	F		
—	溝	18 r18・r18						A	少しだけ深い	

柱土 A:黒色 B:灰色 C:白色ブロック屋 D:薄い黒色 E:薄い茶色 F:黒色に褐色ブロック屋 G:白色厚塗り無し

第Ⅲ-1表 第203次調査（2区）遺構一覧

遺構名	調査時遺構名	時期	建物平面規模		建物面積 (㎡)	柱間寸法 (m)	柱六面平面規模		柱底深さ (掘深)	柱取軸 (掘取)	方位	建物軸	備考
			柱間 (間)	奥行(m) 奥行(m)			柱六面方 (m)	柱底跡 (掘深)					
SA11629	柱列1	平安 前期	3+	8.2+	—	2.2/2.4/2.5	0.6~1.0	0.18	0.4~0.6 (12.7~12.1)	×	×	東西 N33° E	延徳館で確認
SB11620	建物1	奈良	10 3+	22.6 6.2+	—	2.4/2.3/2.4/2.1/2.1/ 2.1/2.4/2.2/2.4/2.2/ 2.0/2.1/2.1	0.6~1.2	0.14	0.35~0.55 (12.7~13.3)	×	×	南北 N33° E	延徳館の南北方向へ SB11330Eと併 旧SA11120(観音)S30
SB11621	建物1	平安 前期	1	3.1	9.3				0.55 1.5/1.5	○	×	東西 N33° E	建替後
SB11622	建物2	奈良	1	3.1	8.1				0.6~0.7 (12.8~12.9)	×	×	東西 N33° E	SB11110と組み合う 建替後 SA11310に取付付く
SB11628	—	古墳	2 2	13.5 5.0	67.0	2.2/2.3/2.1/2.3/2.3/2 2.5/2.1	3 3	0.85~1.2	0.2 (13.0~13.2)	○	×	南北 N33° E	

第Ⅲ-2表 第203次調査（2区）掘立柱棟・掘立柱建物一覧

番号	遺物	種類	形状・遺跡	位置 (M・重量 [g])	調査・採取の特徴	粘土	構成	保存者	調査番号
1	粘土土器	壺	110 S211822	底径 4.0 残存高 2.1	内径 7.7 内径 7.7	赤良	硬 7.5X97.6	底径 3/12	002-04
2	粘土土器	高杯	117 S211824 土層Ⅱ	口径 14.9 底径 12.3 胴径 9.9	内径 13.8 3.27F 内径 13.8 7.7 4.5 2.27F	赤良	流質焼 10YR7/3	口縁部 1/12 底部 1/12	002-04
3	粘土土器	高杯	417 S211824 土層Ⅱ	口径 24.7 底径 18.0 底径 12.8	内径 13.8 3.27F 内径 13.8 7.7 4.5 2.27F	赤良	硬 5YR6/6	口縁部 2/12 底部 1/12 流質浮文付	003-01
4	粘土土器	鉢小	417 S211814	残存高 3.1	内径 4.7 4.7 3.27F 内径 7.7 2.27F	赤良	反焼 7.5YR6/2	口縁部 1/12 赤良	004-04
5	粘土土器	壺	117 S211827 土層Ⅱ	口径 6.0 底径 2.7 底径 4.7	内径 7.7 3.7 3.8 傾斜底 文体部下半部付煎じ入り不明焼 2.27F 内径 7.7 2.1 7.1	赤良	流焼 10YR6/6	口縁部 1/12 底部付流文付	003-01
6	流注器	杯蓋	417 S211819 Ⅱ	口径 7.0 底径 2.8	内径 7.0 2.27F 内径 7.0 2.27F	赤良	硬 2.5YR/1	口縁部 1/12	001-00
7	流注器	壺小	417 S211819 Ⅱ	残存高 4.3	内径 10.0 2.27F 内径 10.0 2.27F	赤良	黄良 2.5Y/1	口縁部 1/12 赤良	002-01
8	土師器	皿	115 SP2 S211824 272	残存高 1.2	内径 4.7 4.7 3.27F 内径 3.27F	赤良	硬 2.5YR6/8	口縁部 1/12	020-01
9	土師器	壺	118 SP4 S211824 272	口径 14.4 残存高 4.9	内径 10.5 2.27F 内径 10.5 2.27F	赤良	反焼 10YR7/2	口縁部 1/12 赤良	020-04
10	磁器品	灯台*	118 SP1 S211824 272	2.3×2.2 厚さ 0.45 重量 400	-	-	-	-	020-04
11	土師器	鉢	115 SP1 S211824 272 流注器	残存高 2.6	内径 3.27F 3.27F 内径 3.27F	赤良	硬 5YR6/6	口縁部 1/12	023-00
12	土師器	鉢	115 SP12 S211824 272 流注器	口径 1.2 残存高 2.7	内径 4.7 4.7 3.27F 内径 7.7 3.27F	赤良	反 5YR7/3 5YR7/4	口縁部 1/12	023-04
13	土師器	鉢	115 SP12 S211824 272 流注器	口径 1.4 残存高 2.3	内径 4.7 4.7 3.27F 内径 3.27F	赤良	硬 5YR6/6	口縁部 1/12	020-10
14	土師器	壺	116 SP4 S211824 272 444 流注器	残存高 2.3	内径 4.7 4.7 3.27F 内径 4.5 3.27F	赤良	反 5YR7/3 5YR7/4	口縁部 1/12	020-06
15	流注器	高杯	116 SP6 S211824 272 444 流注器	底径 10.7 残存高 2.5	内径 10.0 2.27F 内径 10.0 2.27F	赤良	硬 2.5YR6/8	底径 1/12	020-08
16	反動器	壺	116 SP6 S211824 272 444 流注器	残存高 2.1	内径 10.0 2.27F 内径 10.0 2.27F	赤良	動 感光黄 9.0 赤良 反 5YR7/3 5YR7/2	口縁部 1/12 赤良	020-08
17	流注器	杯蓋	116 SP2 S211824 272 流注器	残存高 1.4	内径 10.0 2.27F 内径 10.0 2.27F	赤良	黄良 2.5Y/1	口縁部 1/12 赤良	020-06
18	土師器	壺	118 SP2 S211824 272 444 流注器	残存高 2.5	内径 12.27F 内径 12.27F	赤良	硬 2.5YR7/8	口縁部 1/12 赤良	023-08
19	土師器	鉢	114 SP1 S211824 272	残存高 1.7	内径 3.27F 内径 3.27F	赤良	硬 5YR6/6	口縁部 1/12	022-04
20	粘土土器	壺	118 SP2 S211824 272 流注器	残存高 4.1	内径 7.7 4.7 3.27F 内径 7.7 2.1	赤良	硬 2.5YR6/8	口縁部 1/12	020-07
21	流注器	杯蓋	118 SP2 S211824 272	残存高 1.1	内径 10.0 2.27F 内径 10.0 2.27F	赤良	黄良 2.5Y/1	口縁部 1/12	020-06
22	流注器	鉢小	118 SP7 S211824 272	残存高 2.0	内径 10.0 2.27F 内径 10.0 2.27F	赤良	反 5YR7/1	口縁部 1/12 赤良	020-04
23	土器品	不明品	417 SP1 S211824 272	口径 3.2 残高 2.0 厚み 1.0 重量 571g 7.7×7.7	-	赤良	反 5YR7/2	-	024-03
24	土師器	鉢	118 SP1 S211824 272	口径 7.7 底径 2.9	内径 10.0 2.27F 内径 10.0 2.27F	赤良	黄良 2.5Y/1	口縁部 2/12	024-04
25	陶器	小皿	114 SP4	残存高 1.2	内径 10.0 2.27F 内径 10.0 2.27F	赤良	反 5YR7/3 5YR7/2	口縁部 1/12	022-03
26	土師器	杯蓋	114 SP2-2	残存高 1.9	内径 7.7 内径 7.7	赤良	硬 2.5YR6/8	流注器流文付	022-06
27	土師器	壺	114 SP2-2	残存高 6.8	内径 10.5 2.27F 内径 10.5 2.27F	赤良	反 5YR7/3 5YR7/4	口縁部 1/12	022-07
28	流注器	壺	114 SP2-2	残存高 2.8	内径 10.0 2.27F 内径 10.0 2.27F	赤良	黄良 2.5Y/1	口縁部 1/12 赤良	022-05
29	土師器	壺	114 SP2-2 壺	残存高 2.3	内径 10.0 2.27F 内径 10.0 2.27F	赤良	流注 2.5YR6/1	口縁部 1/12	023-01
30	土師器	鉢・皿	115 SP4	残存高 1.7	内径 3.27F 内径 3.27F	赤良	硬 2.5YR6/6	口縁部 1/12 赤良	023-02
31	土師器	鉢	115 SP1	口径 1.4 底径 1.1 残存高 1.7	内径 7.7 3.27F 内径 3.27F	赤良	硬 7.5YR7/6	口縁部 1/12	023-05
32	土師器	鉢	116 SP1 S211824 272 444 流注器	残存高 2.2	内径 7.7 3.27F 内径 3.27F	赤良	硬 5YR7/6	口縁部 1/12 ~ 2/12	023-06
33	土師器	皿	116 SP1 流注器	残存高 1.7	内径 4.7 4.7 3.27F 内径 13.8 3.27F	赤良	硬 5YR6/6	口縁部 1/12 赤良	023-07
34	土師器	鉢	116 SP4	残存高 1.7	内径 4.7 4.7 3.27F 内径 3.27F	赤良	反 5YR7/3 5YR7/4	口縁部 1/12	023-08
35	土師器	杯蓋	116 SP7 流注器	残存高 1.1	内径 10.0 2.27F 内径 10.0 2.27F	赤良	硬 2.5YR6/8	流注器流文付	024-01
36	流注器	壺蓋小	116 SP7	残存高 3.0	内径 10.0 2.27F 内径 10.0 2.27F	赤良	黄良 2.5Y/1	口縁部 1/12 赤良	023-10
37	流注器	鉢	116 SP2	残存高 1.9	内径 10.0 2.27F 内径 10.0 2.27F	赤良	流注 10B04/1	口縁部 1/12 赤良	024-02
38	土師器	皿	119 SP1	残存高 1.9	内径 4.7 4.7 3.27F 内径 7.7 3.27F	赤良	硬 5YR6/6	口縁部 1/12	021-02
39	土師器	鉢	119 SP1	残存高 2.2	内径 4.7 4.7 3.27F 内径 13.8 7.7 3.27F	赤良	硬 2.5YR6/8	口縁部 1/12	021-03
40	土師器	鉢	119 SP4	残存高 2.0	内径 4.7 4.7 3.27F 内径 13.8 7.7 3.27F	赤良	硬 2.5YR7/8	口縁部 1/12	021-01
41	土師器	杯蓋	119 SP5	残存高 2.0	内径 13.8 3.27F 内径 3.27F	赤良	硬 2.5YR6/6	口縁部 1/12 赤良	024-06
42	流注器	小笠蓋小	119 SP1	残存高 1.2	内径 10.0 2.27F 内径 10.0 2.27F	赤良	反 5YR7/1	口縁部 1/12	024-08
43	土師器	壺	115 S211825	残存高 3.1	内径 10.5 2.27F 内径 10.5 2.27F	赤良	反 5YR7/3 5YR7/4	口縁部 1/12	005-06
44	流注器	杯蓋	115 S211825	残存高 1.6	内径 10.0 2.27F 内径 10.0 2.27F	赤良	反 5YR7/1	口縁部 1/12	005-07
45	反動器	流筒	115 S211825	残存高 1.7	内径 10.0 2.27F 内径 10.0 2.27F	赤良	動 2.5 赤良 流注 7.5YR 赤良 反 5YR7/2	-	001-06

第三-3表 第 203 次調査 (2区) 遺物観察表 1

番号	器種	形状	地区	遺跡	法量(容・重量)(g)	調査・出土の経緯	胎土	構成	色調	保存状況	調査番号
46	土師器	鉢	+15	口径 223 底径 140	残存高 2.1	内面 323F 外口 保存付 内面 323F 323F 保存付	赤 黒	IC-GA-黄緑 10YR7/3	口縁部1/12未満	001-07	
47	土師器	鉢	+15	口径 305 底径 180	残存高 2.8	内面 323F 保存付 内面 323F	赤 黒	IC-GA-黄緑 10YR7/3	口縁部1/12未満	001-05	
48	陶器	瓶	+15	口径 152 底径 93 底径 10		内面 3202F 糸切線付 高台粘付 頸部縮 腰部下半一處 内面 3202F 地上げ方向付 厚肌	赤 黒	IC-GA-黄緑 10YR7/2	口縁部1/12未満 底部完整	001-02	
49	陶器	瓶	+15	口径 162 底径 100	底径 72	内面 3202F 糸切線付 高台粘付 頸部縮 自然釉 内面 3202F 糸切線付 内面全体保存付	赤 黒	黄緑 5Y7/3	口縁部1/12未満 底縁1/2	006-01	
50	陶器	鉢	+15	底径 134 残存高 8.5		内面 3202F 3202F 糸切線付 高台粘付 内面 3202F 厚肌	赤 黒	黄緑 5Y8/1	底縁3/12	001-03	
51	土師器	盆	+18	残存高 3.8		内面 3202F 内面 3202F	赤 黒	IC-GA-橙 7.5YR7/4	-	003-01	
52	土師器	高杯	+19	残存高 3.5		内面 3202F 自然釉 内面 3202F 34F 厚肌 腰部(部分あり)	赤 黒	灰白 2.5Y/1	残存高 3.5	002-02	
53	土師器	皿	+19	口径 117 残存高 2.3		内面 3202F 3202F 内面 3202F	赤 黒	黄緑 7.5Y8/4	口縁部10/12	002-02	
54	土師器	鉢	+18	口径 270 残存高 1.5		内面 323F 4F 腰部(付付し不明瞭) 内面 323F	赤 黒	IC-GA-橙 7.5Y8/4	口縁部1/12未満	001-08	
55	陶器	瓶	+14	底径 8.9 残存高 1.9		内面 3202F 糸切線付 高台粘付 内面 3202F 厚肌	赤 黒	IC-GA-黄緑 10YR7/3	底縁31/12	002-04	
56	陶器	盆	+19	底径 174 残存高 12.9		内面 3202F 3202F 3202F 内面 3202F 3202F 3202F 自然釉 腰部粘付	赤 黒	橙 5Y8/3	底縁31/12	002-00	
57	粘土土師器	鉢	+18	残存高 11.3		内面 3202F 厚肌 内面 3202F	赤 黒	IC-GA-橙 7.5Y8/4	口縁部1/12	010-02	
58	石製品	磨製石斧	+19	4×2.1 残存高最大 22		重量 37g 刃部(一部)に自然釉残存	-	-	-	刃部保存	005-03
59	土師器	杯	+18	残存高 3.6		内面 3202F 3202F 内面 3202F 3202F	赤 黒	橙 7.5Y8/3	口縁部1/12未満	004-04	
60	土師器	鉢	+18	口径 81 底径 28		内面 3202F 糸切線付 3202F 自然釉 内面 3202F	赤 黒	灰白 2.5Y/1	口縁部31/12	003-05	
61	土師器	盆	+18	残存高 3.8		内面 3202F 糸切線付 高台粘付 自然釉 内面 3202F 厚肌	赤 黒	黄緑 2.5Y8/1	-	004-02	
62	土師器	杯	+18	口径(最大) 124 底径 2.6		内面 3202F 3202F 内面 3202F	赤 黒	橙 5Y8/3	口縁部2/12	005-01	
63	土師器	把手	+19	残存高 6.1		内面 3202F 内面 3202F	赤 黒	IC-GA-黄緑 10YR7/3	把手完整	002-02	
64	土師器	蓋	+18	残存高 9.9		内面 32F 32F 内面 32F 厚肌 腰部付	赤 黒	黄緑 2.5Y8/1	底縁31/12	004-03	
65	土師器	蓋	+14	残存高 3.1		内面 323F 3202F 3202F 不明 内面 323F 3202F	赤 黒	IC-GA-黄緑 10YR7/4	口縁部1/12未満	003-06	
66	土師器	皿	+15	口径(最大) 274 残存高 2.7		内面 3202F 3202F 自然釉 内面 3202F	赤 黒	黄緑 5Y7/2	口縁部1/12	005-05	
67	土師器	盆	+14	口径 15.8 残存高 2.9		内面 3202F 内面 3202F	赤 黒	橙 5Y8/3	口縁部1/12	002-00	
68	土師器	把手	+14	残存高 4.8		内面 32F 32F 3202F 3202F 内面 3202F	赤 黒	IC-GA-黄緑 10YR7/4	把手完整	006-04	
69	土師器	皿	+14	底径 146 残存高 1.7		内面 3202F 糸切線付 3202F 内面 3202F	赤 黒	灰白 5Y7/1	口縁部1/12	006-03	
70	土師器	蓋	+14	残存高 3.7		内面 3202F 高台粘付 自然釉 内面 3202F 厚肌	赤 黒	IC-GA-黄緑 10YR7/2	口縁部1/12	006-05	
71	粘土土師器	盆	+14	残存高 5.0		内面 3202F 高台粘付 厚肌 内面 3202F	赤 黒	IC-GA-橙 7.5Y8/4	口縁部1/12未満	006-06	
72	土師器	高杯か	+14	残存高 2.4		内面 3202F 3202F 3202F 厚肌 内面 3202F 3202F	赤 黒	IC-GA-黄緑 10YR7/4	口縁部1/12	006-08	
73	陶器	鉢	+14	残存高 2.7		内面 3202F 3202F 内面 3202F	赤 黒	橙 7.5Y8/3	口縁部1/12未満	006-09	
74	陶器	鉢	+14	残存高 2.7		内面 3202F 自然釉 内面 3202F	赤 黒	黄緑 10Y8/2	口縁部1/12~ 2/12	006-09	
75	土師器	盆	+14	底径 3.8 残存高 5.5		内面 3202F 3202F 自然釉 内面 3202F 自然釉	赤 黒	黄緑 2.5Y8/1	-	007-01	
76	土師器	蓋	+14	残存高 2.6		内面 3202F 内面 3202F	赤 黒	黄緑 2.5Y8/2	口縁部1/12未満	007-02	
77	陶器	鉢	+14	口径 211 底径 142	残存高 9.7 底径 142	内面 3202F 厚肌付 糸切線付 高台粘付(部分あり) 内面 3202F 厚肌付(部分あり)	赤 黒	黄緑 3.5Y8/3 黄緑 10Y8/3	口縁部6/12	007-02	
78	土製品	不明品	+14	3.1×2.0 厚さ 1.3		重量 32g 二面研磨 角部磨削あり	赤 黒	IC-GA-黄緑 10YR7/3	-	007-04	
79	土師器	鉢	+13	口径 86 残存高 3.6		内面 3202F 糸切線付 3202F 厚肌 内面 3202F 地上げ方向付	赤 黒	黄緑 2.5Y8/1	口縁部2/12	007-06	
80	土師器	高杯	+15	残存高 2.1		内面 3202F 糸切線付 自然釉 内面 3202F 3202F 3202F 多方向付	赤 黒	黄緑 10Y8/2	底部完整	007-07	
81	土師器	杯	+15	残存高 3.6		内面 3202F 3202F 厚肌 内面 3202F	赤 黒	黄緑 2.5Y8/1	口縁部1/12	007-05	
82	土師器	杯	+15	底径 43		内面 3202F 糸切線付 3202F 内面 3202F 厚肌	赤 黒	黄緑 2.5Y8/1	口縁部1/12	008-02	
83	土師器	皿	+15	残存高 2.4		内面 3202F 3202F 内面 3202F	赤 黒	灰白 2.5Y/1	口縁部2/12	008-00	
84	土師器	鉢	+15	口径 129 残存高 2.9		内面 3202F 3202F 内面 3202F	赤 黒	橙 2.5Y8/4	口縁部5/12	007-08	
85	土師器	杯	+15	口径 138 底径 2.9		内面 3202F 3202F 内面 3202F	赤 黒	IC-GA-橙 7.5Y8/4	口縁部31/12	007-08	
86	土師器	把手	+15	残存高 5.0		内面 3202F 内面 3202F	赤 黒	IC-GA-橙 7.5Y8/4	把手完整	008-01	
87	土師器	片断破	+15	残存高 3.4		内面 34F 方折込か(2か所) 自然釉 内面 3202F 自然釉	赤 黒	灰白 2.5Y/1	-	008-05	
88	動物動物	象牙片	+15	口径 4.7 残存高 4.8		内面 自然釉 内面 自然釉	赤 黒	黄緑 2.5Y8/1 黄緑 10Y8/4	口縁部1/12	008-06	
89	瓦葺動物	瓶	+15	口径 16.8 底径 14.9	底径 16	内面 3202F 3202F 糸切線付 高台粘付(部分あり) 内面 3202F 自然釉(部分あり)	赤 黒	黄緑 3.5Y8/3 黄緑 10Y8/4	口縁部1/12 底縁1/12	008-04	
90	白磁	皿	+15	残存高 2.2		内面 自然釉 内面 自然釉	赤 黒	黄緑 10Y8/4 灰白 2.5Y/1	口縁部1/12	008-08	

第Ⅲ-4表 第203次調査(2区) 遺物観察表2

番号	品類	形状	地区	遺跡	法量(容)重量(g)	調査・採出の特徴	出土	構成	色調	積存層	調査番号
91	白磁	皿	r15		法量 4.8 積存高 1.1	内装 2002A) 内装 無装飾	甕	丸底	対称白濁色12.黒地 底白2.5Y7/1	底部1/12	009-07
92	陶器	鉢	r15		積存高 8.2	外装 2002F) 黒地 内装 2002F) 黒い片流地	甕	丸底	輪 土色赤7.6黒地 上.5.4.黄緑 10YR7/3	口縁部1/12	009-01
93	粘土土器	豆皿	r15		積存高 2.3	外装 2F) 黒縁流地, 灰土, 赤目 内装 無装飾	中々 甕	丸底	赤褐色5YR6/6	口縁部1/12	009-03
94	粘土土器	腹小	r15		積存高 2.7	外装 無装飾 内装 無装飾	甕	丸底	上.5.4.黄緑 10YR7/4	口縁部1/12	009-02
95	土師器	鉢	r15		口径 15.5 積存高 2.3	外装 無装飾 内装 無装飾	甕	丸底	赤5YR6/6	口縁部2/12	009-04
96	土師器	鉢蓋	r15		口径 13.3 積存高 1.2	外装 2002F) 2002A) 内装 2002F) 2002A)	甕	丸底	赤白2.5Y7/1	口縁部1/12	009-05
97	反動陶器	盃	r15		積存高 2.8	外装 2002F) 黒地(赤目) 内装 2002F) 黒地(赤目)	甕	丸底	輪 黄褐色6.5黒地 灰 底2.5Y7/2	口縁部1/12	009-06
98	陶器	皿	r15		口径 8.8 積高 2.3 厚さ 1.0	外装 2002F) 赤地帯, 自然釉 内装 2002F) 自然釉, 黒いタール状物付着	甕	丸底	赤白2.5Y7/2	口縁部1/12 底面完全	009-07
99	石製品	硬石	r15		長さ 5.1, 幅 4.4, 厚み 1.5 重量 40.0g, 内装面付着 黒縁あり		-	-	-	-	009-08
100	土師器	鉢	r15		積存高 3.1	外装 2002F) 2F) 3.2F) 内装 2002F) 黒地(赤目)	甕	丸底	赤5YR6/6	口縁部1/12	010-02
101	土師器	鉢	r15		口径(確定) 12.0 積存高 2.7	外装 2002F) 内装 2002F)	甕	丸底	灰2.5Y5/1	口縁部1/12	010-03
102	土師器	鉢	r15		積存高 2.0	外装 2002F) 2F) 3.2F) 内装 2002F)	甕	丸底	赤5YR6/6	口縁部1/12	010-01
103	土師器	鉢蓋	r16		積存高 1.2	外装 2002F) 自然釉, 赤灰 内装 2002F)	甕	丸底	赤白2.5Y7/1	口縁部1/12	010-05
104	土師器	鉢蓋	r16		口径 8.9 積存高 1.5	外装 2002F) 2002A) 内装 2002F) 2002A)	甕	丸底	黄灰2.5Y6/1	口縁部4/12	011-06
105	粘土土器	蓋	r16		積存高 1.7	外装 2F) 赤目 内装 2F)	甕	丸底	上.5.4.黄緑 10YR7/4	口縁部1/12	010-07
106	粘土土器	蓋	r16		積存高 3.5	外装 赤土, 赤目, 煤付着 内装 無装飾	甕	丸底	上.5.4.黄緑 10YR7/4	口縁部1/12	010-06
107	土師器	鉢	r16		積存高 2.4	外装 2002F) 2F) 3.2F) 内装 2002F)	甕	丸底	赤5YR6/6	口縁部1/12	011-04
108	土師器	蓋高台	r16		積存高 1.8	外装 2002F) 内装 2002F)	甕	丸底	赤2.5YR6/6	底面1/12	011-05
109	土師器	鉢	r16		口径(確定) 11.8 積高 2.0	外装 2002F) 2F) 3.2F) 内装 2F) 3.2F)	甕	丸底	赤黄緑 10YR6/4	口縁部2/12	011-01
110	土師器	鉢	r16		口径(確定) 12.2 積高 2.9	外装 2002F) 2F) 3.2F) 内装 2F) 3.2F)	甕	丸底	上.5.4.黄緑 10YR7/4	口縁部2/12	011-02
111	土師器	皿	r16		口径 17.8 積高 2.1	外装 2002F) 2F) 3.2F) 内装 2F) 3.2F)	甕	丸底	赤2.5YR6/6	口縁部2/12	010-08
112	土師器	鉢	r16		口径 12.7 積存高 3.7	外装 2002F) 2F) 3.2F) 内装 2F) 3.2F)	甕	丸底	赤2.5YR7/6	口縁部2/12	010-09
113	土製品	不明品	r16		積存高 2.2	長さ 2.3g 重量 4.0g, 底面付着 2F)	甕	丸底	赤白2.5Y5/6	-	011-06
114	土師器	移動式 蓋小	r16		積存高 5.3 積存高 3.8	外装 2F) 赤目 内装 2002F) 2F)	甕	丸底	上.5.4.黄緑 10YR7/6	-	011-07
115	土師器	鉢蓋	r16		口径(確定) 18.3 積存高 1.4	外装 2002F) 2002A) 内装 2002F) 2002A)	甕	丸底	赤黄緑 10YR6/2	口縁部1/12	012-02
116	土師器	鉢蓋	r16		口径(確定) 19.0 積存高 1.8	外装 2002F) 2002A) 内装 2002F)	甕	丸底	赤黄緑 10YR6/2	口縁部1/12	012-01
117	土師器	鉢	r16		積存高 2.7	外装 2002F) 2002A) 内装 2002F)	甕	丸底	黄灰2.5Y6/1	口縁部1/12	012-04
118	土師器	鉢	r16		口径 8.4 積存高 3.5	外装 2002F) 内装 2002F)	甕	丸底	赤5Y6/1	口縁部2/12	011-08
119	土師器	鉢	r16		口径(確定) 12.8 積存高 2.1	外装 2002F) 2002A) 内装 2002F) 自然釉, 自然釉	甕	丸底	赤黄緑 10YR6/2	口縁部1/12	012-03
120	反動陶器	盃	r16		積存高 1.3	外装 2002F) 黒地 内装 2002F) 黒地	甕	丸底	輪 黄褐色6.5黒地 灰白 10YR7/3	口縁部1/12	012-05
121	土師器	鉢	r16		積存高 2.2	外装 2002F) 2F) 3.2F) 内装 2F) 3.2F)	甕	丸底	赤5YR6/6	口縁部1/12	011-03
122	土師器	転写磁	r16		積存高 2.1 7.1x4.3	外装 2002F) 赤地帯, 赤目 内装 2002F) 赤土, 赤目, 中々, 磁器 磁器	甕	丸底	黄灰 10Y5/1	-	012-06
123	土師器	高鉢	r16		法量 11.4 積存高 1.0	外装 2002F) 2F) 3.2F) 内装 2F) 3.2F)	甕	丸底	赤黄緑 10YR6/4	底面4/12	012-07
124	土師器	鉢	r16		積存高 2.8	外装 無装飾 内装 2002F)	甕	丸底	赤2.5YR6/6	口縁部1/12	012-06
125	土師器	鉢蓋	r16		口径(確定) 18.4 積存高 1.3	外装 2002F) 2002A) 内装 2002F)	甕	丸底	赤白2.5Y7/1	口縁部1/12	012-06
126	土師器	磁瓶	r16		積存高 2.1	外装 2002F) 流白磁器付着, 自然釉, 赤目 内装 2002F) 2002F) 自然釉, 赤目	甕	丸底	黄灰2.5Y6/1	-	013-01
127	土師器	蓋	r16		積存高 6.0	外装 2002F) 内装 赤土, 赤目	甕	丸底	上.5.4.黄緑 10YR7/3	-	013-03
128	土師器	蓋	r16		積存高 7.0	外装 2002F) 内装 赤土, 赤目	甕	丸底	黄灰2.5Y6/1	-	013-02
129	土師器	鉢	r16		積存高 4.5	外装 2002F) 自然釉 内装 2002F) 自然釉	甕	丸底	上.5.4.黄緑 10YR7/2	口縁部1/12	013-05
130	土師器	鉢	r16		口径(確定) 15.4 積存高 2.5	外装 2002F) 2F) 3.2F) 内装 2002F)	甕	丸底	赤5YR7/6	口縁部1/12	013-04
131	土師器	鉢	r17		積存高 2.3	外装 2F) 3.2F) 内装 2002F)	甕	丸底	赤5YR6/6	口縁部1/12	013-06
132	土師器	鉢	r17		積存高 2.6	外装 2F) 赤目, 2.2F) 内装 赤目, 赤目	甕	丸底	上.5.4.黄緑 10YR7/4	口縁部1/12	013-07
133	土師器	転写磁	r17		積存高 4.0 4.9x6.3	外装 2002F) 内装 赤土, 赤目	甕	丸底	赤黄緑 10YR6/2	-	014-01
134	粘土土器	蓋	r17		積存高 5.2	外装 2F) 赤目 内装 2F) 赤目	甕	丸底	上.5.4.黄緑 10YR7/4	口縁部1/12	014-02
135	粘土土器	蓋	r17		法量 8.1 積存高 5.0	外装 2F) 内装 無装飾	甕	丸底	上.5.4.黄緑 10YR7/4	底面1/12	014-03

第三一五表 第203次調査(2区) 遺物観察表3

番号	器種	形状	材質・通径	容量(容・重量)g	調査・採取の特徴	出土・構成	色調	保存度	調査番号
136	粘土土器	小型鉢	口径 8.8 高さ 9.5 底径 5.2	内径 7.7×5.15×3.27 内径 7.7×5.15×3.27		甌	LC-GI-黄7SV96/4	口縁部1/12 底面劣	014-04
137	土師器	甕	口径 17.0 残存高 2.4	内径 10.327 横付着 内径 10.327 工具跡なし 口縁部に横付着		甌	LC-GI-黄7 SV97/3	口縁部1/12	014-05
138	須恵器	内蓋皿	口径 5.2	内径 3.027 裏方斜式丸く2か所 内径 3.027		甌	黄7M4	-	014-06
139	粘土土器	餅付釜	底径・高さ 6.8 残存高 10	内径 4.327 内径 4.9-3.37		甌	黄7M7	底面1/12	015-03
140	粘土土器	釜か	底径 3.1 残存高 2.4	内径 2.7 底径 2.7 内径 2.7		甌	LC-GI-黄7 SV97/4	-	015-05
141	粘土土器	釜	底径 6.1 残存高 4.1	内径 3.9 2.7 底面に縦筋・横筋 横筋 横付着 内径 3.9 底径 3.9		中・中 甌	LC-GI-赤7 SV95/4	底面ほぼ完全	015-02
142	粘土土器	釜	底径 4.4 残存高 2.7	内径 4.3 3.7 内径 2.7 底径 2.7		中・中 甌	LC-GI-黄7 SV96/4	底面劣	015-01
143	石製品	石包丁	口径 7.5 残存最大径 11.0 厚 1.1	重量 100g 1丸か 両面穿孔 両面に横溝あり 刃部に使用による欠け あり		-	-	1/20欠損か	015-04
144	陶器	鉢	底径・高さ 10.0 残存高 2.8	内径 6.027 7.7 2.07 2.7 内径 6.027		甌	LC-GI-黄7 SV96/3	底面1/12	015-06
145	青磁	鉢	残存高 3.2	内径 3.027 7.7 遺付片 残存 内径 3.027 7.7		甌	黄7M11 裏地 灰白 2377/1	口縁部1/12 裏面	015-05
146	粘土土器	餅付釜	底径 10.4 残存高 2.6	内径 5.9 横筋1 縦筋 7.7 3.27 内径 7.7 3.27		甌	黄7 SV96/8	底面1/12	016-03
147	粘土土器	釜	残存高 7.2	内径 10.7 裏方丸 内径 10.7 7.7		中・中 甌	LC-GI-黄7 SV96/4	-	017-07
148	須恵器	鉢蓋	口径・高さ 9.8 残存高 1.9	内径 5.027 7.7 底径 内径 5.027 7.7		甌	灰白 SV7/1	口縁部1/12	016-06
149	土師器	鉢	残存高 3.2	内径 3.9 7.7 3.27 内径 3.27		甌	黄7 SV96/8	口縁部1/12	016-05
150	須恵器	鉢	口径 14.0 高さ 3.4	内径 10.9 横筋 7.7 7.7 底径 内径 10.9 7.7 底上 7.7 多方向打		甌	黄7 SV97/1	口縁部1/12	016-07
151	須恵器	水注か	残存高 9.1 残存高 10.0	内径 10.7 2.7 底径 10.0 蓋取口縁部は両方向ではない 内径 10.7 底径 10.0 横筋 縦筋 2.7 平調整		甌	灰10M/1	注口縁部劣	016-08
152	土師器	鉢	残存高 2.2	内径 3.9 7.7 3.27 内径 7.7 3.27		甌	黄7 SV97/4	口縁部1/12	016-04
153	石製品	磨製石斧	残存最大径 24.8 厚 1.4	重量 20.3g 1段研削 両面穿孔 磨面は2段と見られる 1か所		-	-	片断数、上部欠 損	017-01
154	須恵器	鉢蓋	口径 6.2 残存高 2.2	内径 3.027 7.7 底径 2.7 自然剥落(付着) 調整不明 内径 3.027		甌	黄7 SV96/1	口縁部1/12	016-02
155	土師器	皿	残存高 2.2	内径 3.9 7.7 3.27 内径 7.7 3.27 磨面みに縦筋があるが磨面約5割のみが平		甌	黄7 SV96/8	口縁部1/12 裏面	017-02
156	土師器	鉢	残存高 2.1	内径 3.9 7.7 3.27 内径 3.27		甌	LC-GI-黄7 SV97/4	口縁部1/12	017-02
157	土師器	鉢	残存高 3.5	内径 10.327 内径 10.327 7.7 3.27		甌	LC-GI-黄7 SV97/4	口縁部1/12	017-04
158	土師器	釜	残存高 4.8	内径 10.327 内径 10.327		甌	LC-GI-黄7 SV97/4	口縁部1/12	017-05
159	陶器	鉢	口径 14.8 高さ 5.0 底径 5.9	内径 10.027 裏方丸 横筋 7.7 裏台取付 内径 10.027 裏方丸 横筋		甌	黄7M7 SV96/2	口縁部1/12 底面劣	016-03
160	陶器	鉢	残存高 5.8	内径 6.0 横筋 7.7 3.27 裏台取付 内径 6.0 3.27 自然剥落		甌	LC-GI-黄7 SV97/2	口縁部1/12 底面劣	016-04
161	土師器	鉢	口径・高さ 24.5 残存高 4.0	内径 14.7 7.7 3.27 横付着 内径 14.7		甌	LC-GI-黄7 SV97/4	口縁部1/12	016-01
162	粘土土器	鉢	残存高 4.2	内径 10.6 12.0 工具による打 7.7 3.27 内径 10.6 12.0 工具による打 7.7 3.27		甌	黄7 SV96/1	口縁部1/12	017-06
163	陶器	鉢	口径 12.7 高さ 6.2 底径 6.0	内径 6.0 横筋 7.7 裏台取付 内径 6.0 7.7 3.27 自然剥落		甌	LC-GI-黄7 SV97/2	口縁部1/12 底面劣	016-05
164	土師器	鉢	残存高 2.6	内径 3.9 7.7 3.27 内径 3.9 7.7 3.27		甌	LC-GI-黄7 SV96/4	口縁部1/12	016-05
165	土師器	鉢	残存高 2.2	内径 3.9 7.7 3.27 内径 3.27		甌	黄7 SV97/4	口縁部1/12	016-07
166	土師器	甕	残存高 2.4	内径 3.27 内径 3.27		甌	LC-GI-黄7 SV97/4	口縁部1/12	016-06
167	須恵器	鉢	底径 2.8 残存高 2.6	内径 3.027 7.7 底径 2.7 平調整 内径 3.027 7.7		甌	黄7M7 SV95/2	底面1/12	016-02
168	須恵器	転写碗	口径 7.5	内径 9.9 内径 9.9 横筋 縦筋 7.7 底径 7.7		甌	黄7M7	-	019-01
169	須恵器	鉢	残存高 3.8	内径 3.9 7.7 3.27 内径 3.27		甌	LC-GI-黄7 SV97/4	口縁部1/12	016-03
170	土師器	高杯	底径 11.5 残存高 1.7	内径 7.7 3.27 内径 3.27		甌	黄7 SV96/8	底面1/12	019-04
171	土師器	把手	残存高 2.7	内径 3.9 7.7 内径 3.9		甌	LC-GI-黄7 SV96/3	把手先端欠損	019-05
172	須恵器	転写碗	口径 11.5	内径 13.9 1.5 底径 1.5 自然剥落 内径 13.9 1.5 底径 1.5 横筋 縦筋 7.7		甌	黄7M7 SV96/2	-	010-04
173	土製品	製塩土器	残存高 2.0	内径 7.7 7.7 7.7 内径 7.7		中・中 甌	黄7 SV96/6	底面1/12	021-06
174	須恵器	鉢	底径 14.7 残存高 5.0	内径 10.027 裏方丸 横筋 7.7 裏台取付 内径 10.027 裏方丸 横筋 7.7 自然剥落		甌	黄7M7 SV96/2	底面1/12	021-07
175	須恵器	転写碗	口径 6.0×10	内径 9.9 内径 9.9 横筋 縦筋 7.7		甌	黄7M7 SV96/2	-	021-02
176	須恵器	転写碗	底径 7.7 残存高 1.8	内径 10.027 裏方丸 横筋 7.7 裏台取付 内径 10.027 裏方丸 横筋 7.7		中・中 甌	黄7M7 SV96/2	底面1/12	021-04
177	粘土土器	釜	口径・高さ 11.1 残存高 3.2	内径 10.7 7.7 3.27 横付着 内径 10.7 7.7 3.27 裏台取付		甌	LC-GI-黄7 SV96/4	口縁部1/12	021-01
178	青磁	鉢	鉢土	内径 6.0 横筋 7.7 底径 7.7		甌	黄7M7 SV96/2 裏地 灰 白 SV7/1	口縁部1/12	021-05

第三-6表 第203次調査(2区) 遺物観察表4





SZ11623 弥生土器 (3) 出土状況 (南から)



SZ11623 弥生土器 (2) 出土状況 (南から)



SZ11623 土層断面 (西から)



SK11614 (南から)



SK11613 半截状況・土層断面 (南西から)

写真図版 3



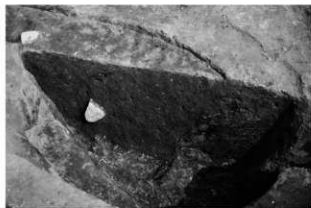
SA11630・SD11612 (北から)



SA11630 (南から)



SB11620・SB11621 (北から)



SB11620・SB11621 柱穴2土層断面(西から)



s14 pit3土層断面(南東から)



SB11622 柱穴3土層断面(北から)



SB11622 柱穴2土層断面(西から)



SD11612 土層断面(南から)



SE11625 土層断面(南西から)



SD11615(北東から)



136



143



6



122



24



151



176

## 報告書抄録

ふりがな	しせきさいくうあと れいわよねんどはつくつしようさがいほう							
書名	史跡斎宮跡 令和4年度発掘調査概報							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	川部浩司・山中由紀子・小原雄也							
編集機関	斎宮歴史博物館							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL0596-52-3800							
発行年月日	西暦 2024年3月19日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″		m <sup>2</sup>	
さいくうあと 斎宮跡	たきでん めいわちやう 多気郡明和町 さいくう 竹川 斎宮・竹川	24442	210	34° 31′ 55″ ～ 34° 32′ 30″	136° 36′ 16″ ～ 136° 37′ 37″	1区 20220728 ～ 20221212  2区 20221007 ～ 20230317	1区 25.3m <sup>2</sup>  2区 200m <sup>2</sup>	学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
斎宮跡 第203次 (1区)	官衙	飛鳥・奈良・ 平安・鎌倉		掘立柱建物・ 掘立柱塀・ 溝・土坑		土師器・中世陶器		飛鳥時代の斜方位区画内の西第三堂
斎宮跡 第203次 (2区)	官衙	弥生・古墳・ 飛鳥・奈良・ 平安・鎌倉・ 江戸		方形周溝墓・ 掘立柱建物・ 掘立柱塀・ 溝・井戸・ 土坑		弥生土器・土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・青磁・白磁・陶器・土製品・石製品・金属製品		奈良時代の東正方位区画北東部
要約	<p>1区 飛鳥時代の斜方位区画内部の建物配置を明らかにすることを主眼とし、特に区画南西角の環状をはじめ西第三堂の構造と規模の把握を目的と調査である。飛鳥時代の斜方位区画内には中心建物(正殿)と外周建物(東・西脇殿各3棟)がロ字型の建物配置をとることが判明した。</p> <p>2区 奈良時代の東正方位区画での発掘調査において、掘立柱塀で構成される方形区画とその内部に南北棟の掘立柱建物2棟を確認した。このうち北側の掘立柱建物は1回の建替えが見られ、建替え後の建物は平安時代前期に建築・廃絶したとみられる。また、その東側で確認した掘立柱塀についても平安時代前期の建物に付随するものと考えられる。奈良時代末には斎宮の中心は史跡東部の鍛冶山西地区へと移動することがこれまでの発掘調査で明らかにされており、今回確認した掘立柱塀と南北棟の掘立柱建物は、飛鳥時代から斎宮の中心であった中垣内地区が平安時代前期にあっても重要な役割を担っていた可能性を提示し、今後史跡東部の方格街区を伴う遺構群との関係という新たな課題を提示することとなった。</p>							

---

史跡 齋宮跡

令和4年度

発掘調査概報

2024年3月19日

編集・発行 齋宮歴史博物館

印刷 株式会社ミフジ印刷

---